

# 時空の先導者 ～創生の 竜と終末の騎士～

ティア

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

世界中で注目を集めるカードゲーム『カードファイト!!ヴァンガード』

その中の1枚と、彼は偶然出会った。抑えきれない興奮と衝動を与えてくれる竜——『クロノドラゴン・ネクステージ』に。

そんな彼——戸坂カズキは、同じ高校の同級生である少女——清水ホノカと出会う。

これは、竜と少女の出会いによってもたらされた、始まりと終わりの物語。

ということ……新しく小説を書きました。つながりが中途半端なのに、何をしてい

るんだとは思いますが。と言うより、作者が一番そう思ってるので……。

ですが、作者としては双闘や超越を取り入れたファイトを書いてみたいという願望があります。それに、いつまでもブレイクライド環境の内容の小説でも、古すぎている気がおきないだろうと思っただのもあります。

かと言って、つながりを放っておくわけではないので、そこは完結させます。この小説は……正直わからない。

気長にやっついていくつもりなので、応援してもらえると嬉しいです。

# 目次

turn0	その竜の名は	1
turn1	少女の願いが実る時	4
turn2	憧れを形に	27
turn3	ルーキーの挑戦	44
turn4	逆転への一手	61
turn5	チームメイト	86
turn6	竜は二度吠える	103
turn7	名前	128
turn8	目覚める真価	155

## turn0 その竜の名は

——出会った。

もう少しで、叫んでしまいそうだった。それでも、思わず立ち上がってしまうほどの衝撃はあったが。

それは、何となくテレビをつけ、適当に番組を眺めていた時のことだった。ある番組のところ、ふとりモコンを操作する手が止まった。

——竜が、そこにはいた。

少年の中に何かが溢れ、抑えきれない興奮となって身体中を駆け巡る。そんな感覚は、初めてのことだった。

今までの人生の中で、色んなことがあった。勉強やスポーツ、習い事。テレビゲームだったり、中学生になってからは部活にも入った。

でも、今この瞬間に感じた興奮を体感することは一度もなかった。今もテレビに映り、眼前の相手に向かって吠える竜の姿から目を離せない。

テレビに映るのは、世界的に有名なカードゲーム『カードファイイト!!ヴァンガード』の

ファイト。詳しいルールはわからないが、少年は今画面に映るユニット、青紫色の竜に釘付けになっていた。

その竜の名は……クロノドラゴン・ネクステージ。

肩に備え付けられた2門の砲台にエネルギーが蓄積する。開いた両手にも魔方陣のようなものが形成され、そこにエネルギーが貯まる。

真つ直ぐに目の前の敵を捉える眼光。一瞬エネルギーが集約したかと思うと、次の瞬間には目を焼くほどの輝きとなって放たれる。

相手の前に立ちほだかる何体かのユニットを吹き飛ばしながら、目標であった相手に攻撃を命中させる。あまりの威力に爆風が生じ、画面が煙に包まれて見えなくなつた。

その煙を割つて、屈強な体格の竜が大地を見下ろす。やがて煙が完全に晴れた時、ネクステージの咆哮が、戦場に轟き、勝利を告げた。

彼——戸坂カズキは、何気ない瞬間に運命の出会いを果たした。この竜に、一目惚れした。言葉では上手く表せない何かを感じた。

それから、彼はテレビに映る竜について調べだした。名前がクロノドラゴン・ネクステージだと言うことも、それがカードファイト!!ヴァンガードというカードゲームのユニットだと言うことも。

彼はヴァンガードというカードゲームについて一から調べ、彼なりにカードを集めて

デッキを組んだ。ルールも独学で覚え、ヴァンガードの世界の仲間入りを果たした。

けど、彼は知らない。自分の好奇心から踏み出した世界が、果てしなく大きく、誰かの運命を揺るがすものだったことに。

カードファイト!!ヴァンガード。そのカードゲームとの出会いが、カズキにとって全ての始まりであり……終わりのでもあった。

## turn 1 少女の願いが実る時

「はあ……」

「どうしたの？ため息ついてたら、幸せが逃げるよ？」

「そう言われてもね……」

友人に忠告されながらも、つい最近高校生になったばかりの彼女——清水ホノカは、憂鬱な様子で窓の外に目を向けていた。普段は明るい性格だが、今は気分が優れていない。

「何？彼氏に振られたとか？」

「そうじゃないし、彼女いないし……。ちよつと、考え事をね」

「考え事なんて、やっぱり恋愛関係じゃないの？」

「違うって！」

ホノカのことをからかうのは、彼女のクラスメイト——堀口アカリ。誰とでも積極的に関わる性格で、ホノカとはすぐに気があった。

「じゃあ何よ？気になる人でもいるの？」

「そうじゃない。……ヴァンガードのことだよ」



「あーなるほど」

『カードファイト!!ヴァンガード』。今、世界で一番注目されているカードゲームだ。

ヴァンガードをしている人は既に数億人を超え、日常の中に当たり前のよう存在するほどだ。

知らない人はまずいない。それほど認知度、のほすののだが……、

「このクラスには、ヴァンガードしてる人がいないからね。もつと言えば、この高校にもか」

「はあ……」

何故か、この高校ではヴァンガードの話を聞かない。クラスメイトにも話をしたが、やっている人はいなかった。

と言うより、他のクラスの人についても、ヴァンガードの話をしているところを見たことがない。

人気があるという理由でヴァンガードを始めたホノカは、すぐにその魅力に取りつかれた。

そんなホノカにとって、同じヴァンガードを通じた仲間がいなかったことを残念に思っている、ということだ。

「アカリがヴァンガード始めるなら、この悩みは解決するんだけどね」

「無理無理。何か難しそうだし、私にはできないって」

「そんな……。一人でもいいからヴァンガード仲間がほしいのに……」

「ごめんね。力になれそうになくて」

「そう思うなら、ヴァンガードしようよ……」

手を合わせて謝るアカリを見て、ホノカはまたため息をつく。それほど、ホノカにとつてはダメージの大きい事実だった。

「じゃあ、今日も今から一人でシヨップ行くの？」

「アカリが一緒に行ってくれる可能性は……ないよね」

「私は部活があるからね。そろそろ遅れそうだから、また明日！」

「あ……うん」

急ぎ足で教室を出るアカリを見送り、ホノカは重い腰を持ち上げる。

「さて……行こうかな」

\*\*\*

カードショップ『ミルクィウェイ』。ホノカの行きつけのショップで、常連客として名を連ねている。

「こんにちは、店長！」

「いらつしやいホノカちゃん。今日も来てくれたんだね」

「はい。お世話になってます！」

ホノカと親しげに話すこの人は、ミルクィウェイの店長をしている野島タカシ。20代後半で、人当たりがいい。

「今日はお客さんが少ないですね……。誰かとフアイトしたかったんですけど」

「やっぱり、学校にはヴァンガードをやってる人はいないのかい？」

「はい……」

本当は、ヴァンガード仲間と一緒に、放課後にショップでワイワイすることを夢見ていた。そんな淡い期待を抱きながら、ホノカは高校に進学した。

でも、現実はそのままで甘くはなかった。認知度を鵜呑みにして、高望みした結果がこれだ。

実際、ヴァンガードが特別であって、カードゲーム自体がそこまでメジャーに取り上げられているわけではない。

「まあ、ゆっくりしていいよ」

「ありがとうございます、店長。誰かとファイトして、気を紛らわしますよ」

ミルキーウェイの造りは、至ってシンプル。店に入つてすぐ手前にレジ。その近くにブースターなどが売っている。

壁際にはシューケースが並べられ、店の奥がファイトスペースとなつている。

そこには、人数は少ないものの、確かに何人かがカードゲームをしている。どれも、ヴァンガードだ。

とりあえず、誰かにファイトの相手をしてもらおう。そう思った時だった。ファイトスペースとは別の場所、ブースターが売られているスペースに、気になる人物を見つけた。

「……………」

右手にはブースターパック、左手には財布を持った男子だった。つまるところ、自分の懐と相談しているわけだろう。だが、ホノカが気になったのは、そんなところではなかった。

(あの人、私と同じ高校の制服を着てる！)

ヴァンガードをしている人が、全くいなかっただけじゃない。それがホノカには、とにかく嬉しかった。

「あの……………ちよつといいですか？」

と、ホノカに気づいた彼が、先に声をかけていた。手には変わらずブースターパックを持つている。

「何かな？」

「俺、今あんまりお金がないんですけど……ギアクロニクルのカードが入ったオススメのパックってないですか？」

優しそうな、好印象を与える少年だった。身長はホノカより少し高め。男子にしては低身長だ。

「お金がないんだよね？ だったら、時空超越とかどうかな？ 収録されているギアクロニクルの種類も多いし、オススメだと思うけど」

「時空超越か……ありがとうございます。参考になりました」

そう言うと、時空超越のブースターパックを取りに行く。

ちなみに、彼が手に持っていたのは、討神魂撃。そのパックにもギアクロニクルは収録されているが、種類が少ないため、カードを手に入れられないかもしれないと思ったからだ。

「ところで君、私と同じ高校だよ？ ほら、制服一緒だし」

「あ……言われてみれば。全然気づかずに声かけてました。たまたま近くにいたので」

「そうなんだ。ところで、君もヴァンガードしてる？ 私もしてるんだけど、これからどう

かな?」

自然な流れで、彼をファイトに誘う。ギアクロニクルのカードを探しているということは、ヴァンガードファイターのはずだ。

「本当ですか?俺でよかつたら、相手になりますよ」

「よかつた!私、高校でヴァンガード仲間を作りたいって思ってたから、一緒にヴァンガードしてくれるなら、とても嬉しいよ!」

上手くファイトに誘うことができたようで、ホノカは一安心する。

「そう言えば、自己紹介がまだだったよね。私は清水ホノカ。1年生です」

「1年……何だ、同級生だったんだ。俺は戸坂カズキ。よろしくな」

さっきまでの丁寧な口調が砕け、親しげに話し出す。同じ1年生なら、ホノカにとっても接しやすい。

「こちらこそよろしく!戸坂君!」

「そんな畏まらなくても、下の名前でもいいって。俺は、ホノカさん……だよな?そう呼ばせてもらうよ」

「なら、私もカズキ君って呼ぶことにするよ」

こうして、ホノカとカズキのファイトが、ミルキーウェイの一角で始まろうとしていた。

「そう言えば私、これでもこのショップの上位クラスのファイターなんだよね。ここ何日か負け無しかな」

「凄いな……有名ってことか?」

「そういうこと! 私に勝つのは、簡単じゃないよ?」

実は、ホノカはかなりの実力者。このショップはもちろん、いくつかのショップの大会で優勝する実績があるほどだ。

「へえ……。でも、そっちの方が楽しそうだ!」

「そう言う人、私大好きだよ! さあ、刮目せよ! これが、このショップに名を連ねるファイターのデツキ……。あれ?」

「どうした?」

「デツキがない! 家に忘れて来ちゃった!」

「は!」

どこを探しても、ホノカのデツキが見当たらない。学校に忘れたとは思えないため、家に置いてきた可能性が高い。

「……ホノカさんって、おつちよこちよいなんだな」

「うっ、うるさいよ! 誰だって、うっかりすることはあるよ! / / /」

ホノカは、顔を真っ赤にして反論するが、その慌てようが面白く、カズキは笑いを漏

らす。

「うう……さっきの名乗りを思い出したら、恥ずかしくなってきた……」

「ホノカさんの抜け癖はいいけど、フアイトはどうするんだよ？ デツキがないなら、フアイトできくない？」

「抜け癖言うな！ こうなったら……仕方ないか。ちよつと待つてて」

そう言うのと、ホノカさんはレジに向かう。何やら店長らしい人と話をしているようだ。

「何してるんだ……？」

待つている間、カズキは自作のデツキを取り出してカードを眺める。順番に見ていく中、ある一枚のところで目が止まった。

「……やっぱ、格好いいな」

ヴァンガードを始めようと思うきつかけとなった一枚……クロノドラゴン・ネクステージ。

テレビに映る竜の姿に釘付けになった俺は、すぐにヴァンガードのことについて調べた。ルールを覚え、一からデツキを組んだ。

「竜に一目惚れつてのも、変な話だけだな」

その店長の笑い声がこつちまで聞こえてくる。それに対して、またホノカさんが真っ



赤になって言い返しているものだから面白い。

「清水ホノカさん……か。あんな人がいたなんてな」

正直、俺もヴァンガード仲間を探していた。ヴァンガードをしている人が、同じクラスには誰もいなかった。

そこに現れたのが、ホノカさんだった。男子じゃなかったのは残念だが、なかなか面白い人だ。これからも、仲良くやっていけそうだ。

「ごめん、お待たせ！」

ホノカさんが戻ってきた。その手には、一つのデッキを持っている。

「あれ？そのデッキは？」

「お店のお試しデッキだよ……」

「なるほど。これは上位クラスのファイターさんのハンデということですか？」

「うーっ、人のこと散々馬鹿にして！こうなったら、このデッキで徹底的に打ち負かしてあげるから！」

「それは楽しみだな。さつきとは別の意味で」

「うぬぬ……！」

うん、これはもう確信した。この人、普通に面白い。いじるの超楽しい。

「さ、デッキを出して！ファイトするよ！」

「色々あったけど、ようやくか……！ああ！しようぜ、ファイト！」

自作のデッキを構え、俺はファイトの準備を始める。このシヨップには、各テーブルにヴァンガードのプレイシートが常設されているので、ファイトしやすく助かる。

「このデッキの最初のヴァンガードは、と……。あ、これか」

「慣れないデッキなんだし、ちゃんと確認しておけよ？」

「言われなくてもやってますー！」

ヴァンガードは、地球によく似た惑星『クレイ』に存在するユニットを従えて、自身が先導者——ヴァンガード——となって戦うカードゲームだ。

そのために、自身が戦う力を得る必要がある。それが、『ライド』。その準備が、さつき行ったグレード0のカードを伏せる行為だ。

そのグレード0のカードを、ヴァンガードの盤面の

R V R

R R R

Vの部分に置く。Rの部分には、共に戦うユニットを呼ぶための場所だが、今は関係ない。ファイトが始まってから、この場所は使っていく。

「それじゃ、デッキシャッフル頼む」

「わかったよ。そっちのデッキも貸して？」

互いにデッキをシャッフルし、5枚のカードを引いて最初の手札とする。ここで1度だけ、手札を引き直す行為『マリガン』を行い、不要な手札を入れ換える。

「準備はいいかな？カズキ君？」

「ああ。やるか、ホノカさん！」

「スタンドアップ！ヴァンガード!!」

伏せられていたカードが表になり、ファイトの開幕を告げる。

「私は、士官候補生 アンドレイ！（5000）」

「ようやくファイトできる……楽しみだ！俺は、ガンナーギア・ドラゴキッド!!（5000）」

ヴァンガードには、それぞれ『克蘭』と呼ばれる集合体がある。カズキはギアクロニクル。ホノカはアクアフォースと呼ばれる克蘭だ。

「清 ♪水 ♪だから、♪アクア ♪フォース？」

「そうじゃない！適当に選んだの！」

「じゃあ、そう言うことにしておくよ」

「く〜！軽口叩いて起こらせるとどうなるか、教えてあげるから！私のターン、ドロ〜！」

ターンの最初には、横向き（レスト）になったユニットを縦向き（スタンド）にする。

ユニットはレストすることで、アタックしたり能力を使うことになる。それをもう一度行動できるようにするための行程が『スタンド』。

続いて『ドロー』。デッキからカードを1枚引いて手札にする。今回は最初のターンのため、スタンドはせずにドローだけだ。

「ライド・ケルピーライダー ポロ！（8000）」

ヴァンガードは、ターンに1度だけグレード以上のユニットに成長できる。これが、『ライド』だ。ライドを繰り返して最終的にグレード3になることで、ヴァンガードは強力になる。

また、グレード3になると、ファイトを優位に進められる技が使えるようになる。ヴァンガードにおける1つの目標は、グレード3になることでもある。

「この時、アンドレイの『先駆』発動！ポロの後ろに、このカードを移動！」

ヴァンガードは、さつき説明したクランを統一してデッキを組む。複数のクランでデッキを組むこともできるが、統一することでメリットがある。

それが、今のアンドレイのスキル、先駆。限られたグレード0のユニットは、同じクランのユニットにライドされたとき、共に戦う仲間——リアガード——として、さつき説明した盤面の図のRの部分に移動する。

ヴァンガードは、リアガードと協力して戦うカードゲーム。序盤からリアガードを増

やすことができるこの先駆は、非常に重宝する。

「先攻はアタックできないし、特にすることもないから、これで終わりだね。ターンエンドー！」

「よし。今度は俺のターンだ。ドロー！」

俺は力強くドローし、手札を増やす。早速俺も、ライドしてヴァンガードを成長しようとするが……

「……ない」

「え？」

「グレードーのカードがない」

ヴァンガードのカードの左上にグレードは記されている。だが、6枚の手札全てを何度確認しても、グレードーのカードはどこにもない。

「もしかして、手札事故？」

「……みたいだ」

「調子に乗った罰が当たったんだよ」

「なわけあるか！とりあえず……Gアシストで」

ヴァンガードにおいて、もつとも恐れられているのが、手札事故だ。1ターンライドできないだけで、一気に不利になってしまう可能性を秘めているのも、ヴァンガードの

特徴だ。その対処法が、『Gアシスト』。

「じゃあ、手札を確認するから、私にその事故っぷりを見せてよ」

「ムカつく言い方だな……」

「君の言い方を真似しただけだよ♪」

まずは手札を公開して、ライドできないかどうかを確認させる。その後、デッキの上から5枚見て、1つ上のグレードのカードを手札に加える。これが、Gアシストの流れだ。

「えっと……手札はどんな感じかな？」

カズキの手札は、こうなっていた。

G 3 : クロノジェット・ドラゴン

G 3 : フェイトホイール・ドラゴン

G 2 : スチームファイター プズル・イリ

G 3 : 次元放逐の時空巨兵

G 2 : スモークギア・ドラゴン

G 0 : スチームメイデン ウルル

（クロノジェットか……。ギアクロニクルなら、安定のユニットだね。ストライドを中心としたデッキかな？）

だが、ホノカは妙に気になる点があった。

（でも、プズル・イリを入れている……。と言うことは、双闘を織り混ぜたデッキってことだよな？ それなら、クロノジェットの相手は、ルインデイスポーザル・ドラゴンのはずなんだけど……）

今確認した手札の中に、そのようなユニットはいない。フェイトホイール・ドラゴン、次元放逐の時空巨兵。どれも、双闘とは関係ない。

（まあ、いつか。スキルを考えたら、採用していてもおかしくないか）

ホノカはそう結論づけて、ファイトに戻る。

「確認したよ」

「じゃ、5枚確認して……。あったな。こいつを手札に加える」

「加えたね。なら、手札2枚とGゾーン2枚を除外してね」

Gアシストは便利なルールだが、言わば最後の手段。代償として、計4枚のカードを除外、このファイト中は一切使えなくしてはいけない。

カズキは一瞬迷った後、カードを除外する。手札からは、次元放逐の時空巨兵と、プズル・イリを除外した。そして、Gゾーンからは……

「……ん？」

「え？何か間違ってた？」

「あ、いや。何でもないよ！」

Gゾーンから除外したカードを見て、ホノカは経験者としての観点から、自然と疑問の声漏れていた。カズキが除外したカードは、この2枚だ。

時空竜 ミステリーフレア・ドラゴン

時空竜 ラグナクロック・ドラゴン

(ミステリーフレアを入れてるんだ……。でも、ラグナクロックを除外するなんて、ちよつともつたないな)

ラグナクロック・ドラゴンは、スキルを使うのに同じカードがもう1枚必要なカード。元から奇数枚入れてるならわかるが、偶数枚の採用だと、スキルが使えない場合がある。(さつきからからかってくるし、気づいてないなら放つとこつと)

「じゃあ続けるぞ。ライド！メーザーギア・ドラゴン！（8000）ガンナーギアは先駆で、後ろへ移動！」

無事にライド成功。Gアシストに失敗したら、どうなることだったか。



「カズキ君。言うまでもないと思うけど、ちゃんと勝ち筋をイメージしようね?」  
 「わかっているって。このゲームは、イメージすることが重要だろ?」

ユニットの行動や、相手の心理に至るまで、イメージしてファイトできた人が勝利できる。先の先まで展開を読み、相手の先を行く。それが、ヴァンガードだ。

「じゃあ早速……ガンナーギアの『ブースト』、メーザーギアで『アタック』! (13000)」

ヴァンガードにおけるアタックは、前列のユニットが行うことができる。前列とは、さつきも示した盤面の

R R  
 R V R  
 R R R

Vとその隣隣のユニットのことを言い、基本的にはリアガードが揃えば最大で3回アタックできる。

また、グレードが0と1のユニットは、前のユニットがアタックした時、つまり後列にいる時、自身をレストしてパワーをアタックしているユニットに与えることができる。

今回は、前列にいるヴァンガードのメーザーギア・ドラゴンが、その後ろにいるガンナーギア・ドラゴキッドのブーストを受けて、アタックした。

「まだ序盤だし、ここはノーガードでいいね」

「だったら、ドライブチェック……スチームバトラー マシユダ。クリティカルトリガー！」

クランを統一する理由は、さっきの先駆以外にもある。それが、今発動したトリガーだ。

トリガーは、同じクランのユニットがいないと発動できない。トリガーはどれも強力で、使いこなすことで、ファイトを上手く進められる。

トリガーは4種類あり、与えるダメージを1つ増やすクリティカル、デツキから1枚引くドロワー、リアガードをスタンドさせるスタンド、ダメージが相手以上のときに自分のダメージを1枚回復できるヒールがある。

また、トリガーには共通してパワー5000を好きなユニットに与える効果があり、この要素がファイトを大きく左右する。

「効果は全てメーザーギア！（18000 ☆2） 早速2ダメージ……受けてもらおう！」

ユニット同士のバトルは、パワーの高い方が勝つ。メーザーギアは、合計18000。対してポロは8000。メーザーギアの勝ちのため、ダメージを与えられる。

「もうトリガーを引くなんて……。ダメージチェック！1枚目、レールガン・アサルト。」

2枚目、ガンダイバー・ドラゴキッド」

トリガーが発動するタイミングは、ヴァンガードがアタックした時のドライブチェックか、ダメージチェックの時だ。

今はトリガーが発動せずに、そのままダメージゾーンに置かれる。

このダメージゾーンに置かれたカードが、6枚になったファイターが負けとなる。

「俺はこれでターンエンド」

カズキ：ダメージ0 ホノカ：ダメージ2

「私のターン、ドロロー！今度はこっちの番だよ！ケルピーライダー デニス（10000）にライド！」

グレードがまた1つ上がり、ヴァンガードが成長する。このグレードが上がることは、あるメリットがある。

「続けて『コール』するよ！戦場の歌姫 ローゼ！（9000）ケルピーライダー ポロ！（8000）」

ヴァンガードは、仲間であるリアガードを従えて戦うことができる。その仲間を呼ぶことが、コールだ。

コールできるのは、ヴァンガードのグレード以下のユニットだけ。グレードが高くなるほど、強力なユニットをコールできるようになる。

「アタック行くよ？ポロでメーザーギアにアタック！（8000）」

「ノーガード！ダメージチェック、ニキシーナンバー・ドラゴンだな」

（ニキシーナンバー？このユニットも双闘を持つけど、プズル・イリとは違うユニットが必要のはず……。どういうデツキ構成なんだろう？）

これまでに公開されたグレード3のユニットを見ても、かなりばらつきがある。ホノカには、カズキのデツキ構成が全く読めなかった。

（考えても仕方ない。デツキだって、そのうちわかるはず！）

「アンドレイのブースト、デニスでアタック！（15000）　ドライブチェック、士官候補生　アレキボス。ゲット！スタンドトリガー！」

「く……スタンドトリガーか……！」

「ポロをスタンドして、パワーも与えるよ！（13000）」

これで、ホノカさんは後2回アタックできる……。それに、まだこのアタックのダメージチェックが残っている。

「ダメージチェック、万里を駆けるギアホース」

「ローゼも続けてアタック！（9000）」

「くそ……これもノーガード！ダメージチェック、スチームナイト シュ・シン。ドロートリガー！1枚ドロし、パワーはメーザーギアへ！（13000）」

これで、カズキのダメージは一気に3。トリガーを引いたが、まだポロのパワーはメーザーギアより低くない。同じパワーならアタックは通るため、このままでは4ダメージ目を受けてしまう。

だが、そう簡単に勝敗がつかないのがヴァンガード。ダメージを回避するための手段が、ヴァンガードにはある。

「まだまだ行くよ！ポロで2回目のアタック！（13000）」

「そうはさせない！邯鄲の夢のギアキャットで『ガード』！」

アタックは、ただ受け続けるだけじゃない。手札から、ヴァンガードのグレード以下のユニットをコールして、アタックを守ってもらうことができる。それが、ガード。

ガードの時には、カードの左側に記されたシールド値を足して計算する。今回は、ポロが13000。メーザーギアが、ギアキャットのシールド値10000を足して合計23000。防御側の勝ちだ。

防御側が勝った場合、アタックは通らない。ガードに使ったユニットは、すぐにドロップゾーンと置かれる場所に置かれる。

「トリガーに助けられたみたいだね……。ターンエンド！」

カズキ：ダメージ3　ホノカ：ダメージ2

「今度は俺の番だな。行くぜ！スタンドアンドドロー！」  
レストしたユニットをスタンドし、俺は手札を増やす。そうして、俺は新たなユニットにライドするため、手札の1枚に手を伸ばした……。

## t u r n 2 憧れを形に

「俺のターン、スタンドアンドドロロー！」

偶然ショップで出会った同じ高校の同級生、清水ホノカ。俺は今、彼女とフアイトしているところだった。

「ライド！スモークギア・ドラゴン！（10000）」

俺もグレード2にライド成功。コールできるユニットの幅が広がる。

「グリマーブレス・ドラゴン（9000）」をコール！さらにその後ろに、スチームメイデン ウルル（5000）をコール！」

（……ウルル？）

ホノカは、カズキのコールしたユニット、スチームメイデン ウルルに引つ掛かりを覚えた。

（ウルルはグレード0……シールド値も他のユニットより高いから、手札に温存するのがセオリーなんだけど……）

リアガードがない今、少しでも戦力を整えたかったのか。だが、どうも腑に落ちない。

「ガンナーギアのブースト、スモークギアでアタック！（15000）」

「ノーガード！」

「ドライブチェック……引つ込み思案のギアレイヴン。トリガーは無しだな」

「うっ、厄介なユニットを……」

俺がドライブチェックで引いたカードが、何故厄介だと言うのか。その理由は、後々わかることだろう。

「ダメージは……戦場の歌姫 カロリーナ。ヒールトリガーか……。ダメージはカズキ君の方が多いから、今回は回復なし。でも、パワーはデニスへ！（15000）」

「ウルルのブースト、グリマープレスは……パワーが足りていないから、ローゼにアタック！（14000）」

「させないよ！バブルバズーカ・ドラゴキッドでガード！」

結局、与えたのは1ダメージだけか……。

「ターンエンド！」

カズキ：ダメージ3    ホノカ：ダメージ3

「なかなかやるね……。今度はこっちの番だよ！私のターン！スタンドアンドロー！」



ライド！嵐を超える者 サヴァス!! (11000)」

ついにグレード3。ここから、一気に行動範囲が広がっていく。

「バッテリーブーム・ドラゴン(10000)を、ポロの後ろにコール！ポロとバッテリーブームの位置を入れ換える！」

同じ縦列なら、前後を交換することができる。ブーストのことも考えて、位置交換を使用していくのがベストだ。

「ローゼでグリマーブレスにアタック! (9000)」

「ノーガード。グリマーブレスは退却」

リアガードにアタックがヒットした場合、そのリアガードはドロップゾーンに置かれる。

「アンドレイのブースト、サヴァスでアタック! (16000)」

「そうだな。ここは……ノーガードで」

「じゃあ、『ツインドライブ』だよ！」

グレード3のユニットは、ツインドライブと呼ばれる固有スキルを持つ。ドライブチェックを2回行えるようになるスキルだ。

ちなみに、グレード0と1のユニットの固有スキルはブースト。グレード2は、前列からガードに参加できる『インターセプト』を持っている。

「1枚目……嵐を超える者 サヴァス。2枚目……バブルバズーカ・ドラゴキッド。ゲット！クリティカルトリガー！パワーはバッテリーブームに（15000）クリティカルはサヴァスに！（16000 ☆2）」

「げっ!？」

「ここでクリティカルかよ……。まだダメージ3だったのが救いだった。

「やーい！さっきのトリガーのお返しだよ！」

「くっ、洒落にならねえよ！」

「ほら、早くダメージ受けてよ。カズキ君♪」

「ち……ダメージチェック、1枚目……アップストリーム・ドラゴン。2枚目……ラツキーポット・ドラゴキッド。ドロートリガー！1枚ドロし、パワーはスモークギア・ドラゴンへ！（15000）」

けど、これで俺のダメージは5。後1枚で、俺の敗北が決まってしまう。

「まさかこれで終わりじゃないよね？ポロのブースト、バッテリーブームでスモークギアにアタック！（23000）」

「当然……決まってるだろ！引つ込み思案のギアレイヴンで『完全ガード』！」

ヴァンガードのデッキには、『守護者』と呼ばれるユニットを最大4枚まで入れることができる。このギアレイヴンも、守護者に属するユニットだ。

守護者のユニットは、主に2種類に分かれる。1つは、『クインテットウォール』ガードした時、C B 1でデッキの上から5枚をガードに使用することができる。

そしてもう1つが、今の完全ガード。ガードした時、手札1枚を捨てることで、どれだけパワーの高いアタックも無効化する。

「コストは、スチームメイデン アルリム！」

「えっ!？」

「ん?何かプレイングがおかしかったか?」

「いい、いや何でもない!」

(完全ガードのコストに、完全ガードを……。後のことを考えたら、別のカードをコストにして温存するのがいいはず……)

カズキの手札はGアシストで少なくなっていたものの、あまりガードしていない分、手札は3枚ある。コストは他にもあったはずだ。

(今までのプレイング……もしかして、カズキ君……)

ホノカはある1つの可能性に辿り着く。今、目の前でファイトしている少年の実力が、経験が、どれほどのものか。

「と……とにかく、ターンエンド!」

カズキ：ダメージ5　ホノカ：ダメージ3

「俺のターン、スタンドアンドドロ……」

流石だな。相手は慣れない初心者用のお試しデッキを使っているのに、もう追い詰められた。自ら上位クラスを名乗るだけのことはあるか。

「……ははっ」

「……？何で笑ってるの？」

気がつけば、俺は笑っていた。ピンチだと言うのに、逆に楽しくなっている。

「いや、何でだろう？俺にもよくわかんないけど……何だか楽しいんだ。ホノカさんとフアイトしてると」

「私と？」

「さつきから、ずっと思ってたんだ。ホノカさんって、一緒にいると面白い人なんだなって。だから、自然と楽しくなるんだと思う」

「面白いって……ちよつと馬鹿にしてない？」

「してない！むしろ、褒め言葉だって！」

「本当〜？」

ジト目で俺の顔をマジマジと覗きこんでくるホノカさん。女子にここまで顔を近づ

けられたことがない俺は、恥ずかしくなって顔をそらす。

「ほ、本当だって」

「でも……私も楽しいよ？ヴァンガードを通して、仲間ができたんだから」

「仲間か……」

「その仲間とファイトできる。それだけで、私も嬉しいんだよ！」

「……そっか」

満面の笑みで、俺を仲間だと言ってくれた。それが、俺には嬉しかった。

「さ、カズキ君のターンだよ！ここから挽回して見せて！」

「当たり前だろ？」

話はここまで。今はファイトに戻る。

とは言え……不利なことに変わりはない。もう1点もダメージはやれず、まさに崖っぷち。

（けどな……まだ終わりじゃない。俺は、お前と一緒にファイトするために、ヴァンガードを始めたんだ）

あの日見た、俺の心を突き動かした竜の姿は、今も鮮明に記憶の中に焼きついている。まだお前を見てもないのに、黙ってやられてたまるかよ……！

「時空の鼓動を呼び覚まし、未来へ羽ばたく翼となれ！ライド！クロノジェット・ドラゴ

ン!! (11000)」

「おお……格好いい!」

「続けて行くぞ! ジェネレーションゾーン……解放!!」

ヴァンガードには、グレード3になることで使える強力な必殺技がある。それが、『ストライド』だ。

手札から、グレードの合計が3以上になるように1枚以上捨てることで、デッキとは別に置かれた、裏面が銀色のカードを1枚、ヴァンガードに重ねて使うことができる。

裏面が銀色のカードのことをGユニットと呼び、GユニットはGゾーンに置かれる。

ターンが終われば表でGゾーンに戻り、表のGユニットにはストライドできない。1ターン限定で使えるユニットだが、その分効果は強力だ。

「憧れを翼に変え……未来をこの手に! ストライド……ジェネレーション!!」

クロノジェット・ドラゴンの上に、Gユニットが重なる。未来を手に入れたヴァンガード。その名は……

「クロノドラゴン・ネクステージ!! (26000)」

クロノジェット・ドラゴンの、更なる可能性を掴んだ姿。そのユニットが今、ヴァンガードとして戦場に立つ。が、

「……………え?」

「ん？」

「ここで……ネクステージを出すの？」

「あれ？間違ってる？」

すつとんきような反応。ホノカは確信した。彼は……

「……君、初心者でしょ？」

「え？そうだけど」

（やっぱりか……）

防御に残すべきユニットまでコールしたり、完全ガードのコストの支払いだったり、初心者らしいプレイングがよく目立った。

それも、2、3回ファイトしたくらいで、まだファイトに慣れていないレベルのプレイングだ。ただルールに従い、流れに沿ってるように進んでいるだけ。

つまり……完全なド素人。直線的なプレイングに身を委ねているだけだった。

防御を考えず、闇雲に突っ込んだ結果、カズキは既に追い詰められているのが現状だ。普通は、ここからファイトが盛り上がるはずなのだが。

とは言え、これが戦略だと言う考えも、ホノカの中にはあった。だが、それが確信に変わったのは、このタイミングでネクステージにストライドしたからだ。

「ネクステージは、GB2……Gゾーンかヴァンガードに、Gユニットが2枚以上いない

と、スキルが使えないんだよ？」

「えっ!? 本当かよ!？」

今、カズキのGユニットは1枚だけ。ネクステージのスキルを使うことは、どう考え  
てもできない。

「わかつてなかつたんだ……」

「い、いや俺、フアイトする時はいつも最初にストライドしてたから……」

「いつもって……」

あまりの素人ぶりに、ホノカは呆れる。初心者であることを馬鹿にするつもりはない  
が、カードのスキルくらいは把握してほしい。

「と、とりあえずターン進めるぞ」

「あっ! 誤魔化した!」

「うるさいな! 頂きに立つギアウルフ(7000)と、スチームバトラー マシユダ(5  
000)をコール!」

「つて、言ってるそばからもうこんな……。土壇場なのに、手札を使い切った……」

後先考えないのは、やはり初心者らしさが表れている証拠。ヴァンガードは、勝利の  
ための道筋をイメージすることが大切となる。カズキにはまだ、それができていない。

「どっちにしても後がないなら……やるしかないだろ! ガンナーギアのブースト! ネク



ステージで……アタック!! (31000)」

「スキルも使えないネクステージなら、何も心配しなくて大丈夫かな……。ノーガード！」

「だったら、『トリプルドライブ』だ！」

Gユニットは、ドライブチェックを3回行うことができるトリプルドライブを持つ。トリガーの発動率が、より高まるのだ。

「1枚目、スチームバトラー ダダシグ。クリティカルトリガー! パワーはギアウルフ (12000)クリティカルはネクステージ! (31000 ☆2) 2枚目、スチームファイター アンバー。3枚目、ドキドキ・ワーカー。クリティカルトリガー!」

「……え?」

「パワーはギアウルフ (17000)クリティカルはネクステージ! (31000 ☆3) これで……3ダメージだ!!」

「うええ!? ちよ、ちよつと待って!」

ホノカのダメージは3。そこに3ダメージ入る。つまり、合計ダメージは……。

「だ、ダメージチェック! 1枚目、戦場の歌姫 ファイドラ。2枚目……マグナム・アサルト。3枚目……! レインボー・スナイパー。トリガーだけど、ドロートリガーじゃダメだよ〜!」

もし、ここでヒールトリガーを引けていたら、ダメージを回復して耐えることができていた。最後まで何が起こるかわからないのも、ヴァンガードの楽しみの一つ。

だが、ホノカのダメージはこれで6。トリガーに恵まれた逆転を果たし、カズキはファイトに勝利した……。

\*\*\*

「大口叩いたくせに、俺に負けたな」

「仕方ないよね!? あそこでダブルクリティカルとか、警戒してもなかったし!」

「何を言っても、後の祭りですぞ? ホノカさん」

「うっ! 悔しい! カードの効果も知らない初心者が相手なのに!」

「それに関しては、何も言い返せない……」

借りていたお試しデッキを返却し、ホノカさんと俺は、空いているテーブルに向かい合って座っていた。

「それよりも……何なの、君のデッキは!」

俺のデッキの中身を確認していたホノカさんは力強く両手をテーブルにつく。勢い余って、右手に持っていた俺のデッキまで叩きつけられた。

「おい！カードの扱いが雑だぞ！」

「そ、それはごめん！でも……問題ありすぎだよ！このデッキは！」

「もしかして、デッキの枚数オーバーしてた……？」

「違う！このデッキ……グレードの構成とか、ユニットの統一性とか全然ない！ただカードを詰め合わせただけの、グチャグチャなデッキだよ！」

カズキのデッキは、それはもう散々なものだった。グレードの配分はバラバラで、間違いなく手札事故を起こすレベルだ。

ユニットも、種類がバラバラ。それに、複数スキルのことやコンボも、まるで考えていない。

「それに、Gゾーンのカードだつてまともに使えるカードがないよ。ネクステージは1枚しか持っていないみたいだけど……」

「ああ。俺のお気に入りの1枚だ！」

「……合わせて2枚ないと、スキル使えないんだけど。このラグナクロックだつて」「えっ!?ネクステージのスキルは使えないのか!?!」

「使えないよ！スキルのテキストに、コストとしてネクステージを表にするって書いて

あるでしょ!？」

「あ………本当だ」

Gアシストでラグナクロックを除外したのも、彼なら問題なかったんだ。元から一枚しかないなら、除外してもしなくても関係ない。

「これは、カズキ君に一からヴァンガードを叩きこまないといけないね……」

「そうしてくれると助かるな……。俺、まだヴァンガードのことよくわかってなかったから……」

「いかにも経験者って感じでファイト受けたよね!？」

「それはどうも……」

「褒めてないから!ルールは知ってるのに、実践経験はなかったの?」

ファイトの進め方や、トリガーの割り振りのコツまで把握していた。経験が全くないとは、ホノカは思えなかった。

「シヨツプ大会に何回か参加したくらいだよ。全部一回戦負けなんだけど……」

「うん。何となく想像つく」

「ストライドするまでにファイトが終わってしまうんだよ……。一回できたらマシなくらい」

「よ、弱い……。けど、それも想像つく……」

「それって俺のこと馬鹿にしてるよな!？」

「若干……」

「なっ!？」

俺ってそこまで言われるほどのレベルしかなかったのかよ……。ちよつと傷つく。

「そう言えばさ。カズキ君って、どうしてヴァンガードを始めたの?何か理由とかあるんじゃない?」

「こいつに出会ったからだ」

クロノドラゴン・ネクステージ。俺の全てを変えた、お気に入り一枚。

「ネクステージを使いたくて、ルール調べて、自力でデツキを作ったんだ。ファイトは……まあ、散々だったけど」

勝ったことなんて、もしかしたら今日が初めてかもしれない。それくらい、打ちのめされたはずなのに。

「でも、楽しかったよ。負けばっかりだったけど、ネクステージを使えるだけで、俺は嬉しかった。ネクステージと一緒に戦えるのが、嬉しかったんだよ……」

「そうなんだ……」

「今日は特別楽しかったけどな。勝てたし、ホノカさんが相手だったし」

「……そ、そんな照れるようなこと言わないでよ／＼」

ん？何かおかしなことだったか？俺はただ、思ったことを素直に言っただけなんだけどな？

「ホノカさんは、何でヴァンガード始めたんだ？」

「私は……そうだな」

それらしい理由がないのか、ホノカさんは熟考していた。

「別に、ないんだっいたらいいんだけど……」

「……ある人に憧れたんだ」

ポツリと、そう呟いた。

「その人とフアイトするため……勝つため？……ううん。多分、違う。あの人みたいに  
なりたいて、思ったから……かな」

深くは語らなかつた。だが、ホノカさんの中で重要なことだというのは理解できた。

「君もネクステージに憧れたなら、ちゃんと使いこなせるようにならないとね」

「まあ……何だ。まだまだ未熟者なんで、色々とお世話になります」

「これからビシビシ鍛えていくから、覚悟してね？」

「お、お手柔らかにお願いします……」

軽く約束したが、これから厳しい日々が続きそうだ。

「ま、そういうわけだから……これからよろしくな。ホノカさん」

俺はホノカさんに、手を差し出す。今日巡り会えたことに対する、友好の証として。  
「こちらこそ！カズキ君！」

差し出された手を、ホノカさんは握り返す。戸坂カズキ。清水ホノカ。この日、2人のファイターは、運命の出会いを果たした。

## turn 3 ルーキの挑戦

「……いい？ デツキのグレード配分は、グレード3が7〜8枚。グレード2が10〜11枚。グレード1が15〜16枚。で、グレード0が17枚。わかった？」

「わ、わかった」

「それを踏まえて、君のデツキを見てもらん？」

「えっと……」

俺とホノカさんが出会った翌日のこと。俺は昼休みにホノカさんに呼び出され、昼飯と一緒に食べながら、ヴァンガードについて教えてもらっている。

「君のデツキの配分が、いかにグチャグチャなのかよくわかったでしょ？」

「グレード3とグレード2が12枚……グレード1が9枚……。グレード0は17枚あるけど……」

「トリガーの種類もメチャクチャだね。コンセプトがあつてのことならわかるけど、カズキ君のデツキのトリガーは、適当もいいところだし」

「……返す言葉がない」

俺が勝てなかった原因は、思った以上に複雑だった。まずはデツキの問題。次にプレ



イングに問題があった。全体を把握してファイトを進めるといことが、俺にはできていなかった。

「プレイングのコツはさつき言った通りだから、後はデツキをどうにかしないとね。Gゾーンのカードだって、まともに使えるカードが限られているし」

「まずはネクステージをどうにかしたいんだよね……。でも昨日知ったんだけど、ネクステージってかなりレアなカードなんだな」

「かなりどころじゃないよ!?!一枚で1000円を超えることなんて、当たり前のカードなんだから!」

お、俺って運がよかつたんだな……。俺のネクステージは、ネクステージがパッケージに載っていたブースターから引き当てたものだ。

「せっかくネクステージを持つてるんだし……。一枚だけでもシングルで買っておきたいな……」

「ミルキーウェイには売ってないのか?」

「売ってるよ。でも……。あそこは一枚4000円するから……」

「よっ!?!」

高っ!?!ネクステージって、そんなにレアだったのか。何となく手に入れた俺を褒めてやりたい。

「く……俺、金ないんだけど……。来月になれば小遣いもらえるんだけど」

「昨日言ってたもんね。私も何とかしたいんだけど……。今はできるだけお金を貯めておきたいし」

「何で？」

「来月になれば、新しいブースター『月煌竜牙』が発売されるからだよ!」

そうだったのか。月煌竜牙……。全然知らなかった。

「そのパックにはギアクロニクルも収録されていて、同時にギアクロニクルのトライアルデツキ『鳴動の次幻竜』も発売されるんだ」

ギアクロニクルのデツキか……。これは楽しみだな。

「なら、ネクステージもそうだけど、そのデツキとパックのために金を温存するべきなんだな」

「そういうことだね。だから、今は持つてるカードでデツキを調整して、カードが手に入ったら、本格的にデツキを仕上げていこう」

「了解。で、今日の放課後は時間大丈夫なのか？」

「日直の仕事で、少し遅れるかも。だから、先に行つていいよ」

「そっか。そろそろ昼休みも終わりそうだし、またショップで会おうぜ。その時に、デツキ調整頼む」

「うん。またね、カズキ君！」

\*\*\*

そして、放課後。俺はいち早く、ミルキーウェイに向かっていた。何人かヴァンガードをしている人もいたが、今はデッキをどうにかしなくては。

「いらつしやい。おや、君は昨日ホノカちゃんとファイトしていた……」  
「戸坂カズキです。まだ初心者……ですけど」

「カズキ君ですね。今後とも、このショップをよろしくお願いしますね」  
「はい。で、早速なんですけど……」

俺はデッキを取りだし、1枚のカードを見せる。それは、クロノドラゴン・ネクステージだった。

「おお！ネクステージですか！運がいいですね！」

「でも、1枚しかないんですよ。それで、ネクステージをもう1枚ほしいと思ってるんですけど……」

「ネクステージですか？そうですね……今だと、1枚5000円ですね」

「ごっ?!?樋口1枚分の価値かよ!」

それに、ホノカさんから聞いた値段よりも高くなってるぞ!?

「やっぱ金のこと考えると……敵しいな」

「それにネクステージは、出来れば4枚ほしいカードです。今のカズキ君なら、後3枚買っておきたいですね」

「あ、合わせて15000円……。小遣いが飛ぶ……」

これでは、とても来月のデッキとパックに金を回せる余裕がない。かといって、このままではネクステージは宝の持ち腐れ状態だ。

「無理して1枚だけでも買うかな……?」

「せっかく強力なカードがあるのに、本来の力を引き出せないようなら、もつたいないですからね」

そこなんだよな。だから、迷っているんだけど。

「そこで……賭けをしてみませんか?」

「賭けですか?」

店長はショーケースに展示されていたネクステージを3枚取り出すと、俺の前に並べた。

「このネクステージ3枚を賭けて……君にはファイトをしてもらいます。勝てば3枚の

「ネクステージはタダであげます」

「えっ!?! いいんですか!?!」

「運のいい初心者に、ささやかなプレゼントです。ただし、負けたら自腹で買ってもらいます。最低でも、1枚」

「う……………」

喉から手が出るほどのチャンスだ。ネクステージ3枚を無料でもらえるのは完全に儲けもの。

だが、見返りも大きい。1枚だけでいいとは言え、ここで5000円を支払うのは避けたい。それに……………」

「俺、デツキが完成していなくて……………」

「あれ? 昨日はホノカちゃんとかとファイトしていたんですよね?」

「構成がグチャグチャだとホノカさんに指摘されて……………これからデツキ調整をするつもりなんです」

昨日は運よく勝てたが、今日はどうなるかわからない。

「自分のデツキに、自信がないんですか?」

「……………正直、自信ないですよ。ホノカさんにデツキを見てもらうまでは、これでいいって思ってたんですから。だから、せめてデツキの構成だけでもどうにかしてから……………」

「でも、君が組んだデツキでしよう?」

俺の言葉を一蹴するように、店長は優しくも力強く言葉を被せる。

「構成を見直して、ファイトに臨むこともいいかもしれない。ですが、そんなものに囚われずにファイトすることにも、意味があるかもしれませぬ」

「意味……」

「確かに、ホノカちゃんが言ったように乱雑なデツキかもしれませんが。それでも、君が考えて組んだデツキです。今の君のデツキをぶつけることが、大切ではありませんか?」

今の俺……。持てる力を最大限にぶつけて、弱い俺やデツキでもやれることをする。それが、大切なのか……。

「……わかりました。俺、やります!」

「いいですね。初心者は、何事も挑戦することが必要です。デツキが上手く組めなかったり、弱かったりするのは当然ですよ。誰だって、最初は同じ。経験を重ねて強くなるんです」

「だから、俺にこのデツキでファイトするように……」

「ホノカちゃんの力を借りたデツキではなく、今の君のデツキで、実力を示してほしい。それがきつと、いい経験や成長につながる。強さになる。そう思ったんです」

俺のことを、そこまで考えてくれていたんだな……。まだ出会ったばかりの初心者な

のに……。

「ま、ネクステージを簡単に渡したくないって言うことでもあるんですけどね」

「うわっ、何かズルい」

「価値あるカードを無償であげようと言うのです。それ相応のリスクは負ってもらわな  
いよ」

「さっきいいこと言ってただけに、俺の中の店長の株が一気に下がってる。」

「では、対戦相手なんですが……」

「えっ？店長じゃないんですか？」

「私はしませんよ。シヨップの店長のくせに、ファイトの腕は全然なので……」

いや、散々言ってたくせにファイトはダメなの？

「なので……ユウキ君！」

ブースターパックを眺めていた1人の少年が、俺たちのところに近づいてくる。身長は俺と同じくらいで、同年代だろう。

「何すか？」

「この子とファイトしてほしいんです。ネクステージ3枚を賭けた、重要なファイトなんですよ」

「何!?!そんな太っ腹なことしていいんすか店長!」

「僕から初心者である彼にできる、精一杯の贈り物ですよ」

「贈り物のレベルが凄すぎですって！」

話し口調から察するにムードメーカーと言ったところか。店長とは仲がよさそうだ。

「おい、お前！初心者らしいが、名前はなんて言うんだよ？」

「俺は戸坂カズキだ。あんたは？」

「真島ユウキだ！羨ましい初心者め！俺がネクステージほしくらいだぜ！」

「いや、ユウキ君はギアクロニクル使ってないでしょう？」

「それくらい羨ましいんすよ！店長！」

だろ。うな。シヨップからすれば、損失しかない行為だからな。

「くそう……こんなのに軽々しくネクステージ渡すなんて何か嫌だ！ファイトするぞ、

初心者！」

「ああ。望むところだ！」

テーブルに向かい合い、ファイトの準備を進める。手札5枚を引いて、互いに伏せてあるカードに手を添えた。

「行くぜ、初心者！手加減なしだ！」

「もちろんだ。行くぞ！」

「スタンドアップ！ヴァンガード!!」



ファーストヴァンガードが表になる。ネクステージを賭けたファイトが、今始まった。

「ガンナーギア・ドラゴキッド! (5000)」

「ハープリンガー・ドラゴキッド! (5000)」

相手はなるかみ……どんなクランだ?

「ギアクロニクルか。どこまでやれるかな?俺のターン!ドロー!サンダーシャウト・ドラゴン(8000)にライド!ハープリンガーは左後ろへ!ターンエンド!」

「俺のターン、ドロー!スチームファイター ウルニギン(7000)にライド!ガンナーギアは……後ろでいいか」

今回はGアシストしなかつたぞ。と言つても、手札にグレード1がこれしなかつたけどな……。

「ガンナーギアのブースト、ウルニギンでアタック! (12000)」

「おっと、毒心のジンでガード!」

「つてことは……トリガーが出てても無理か。ドライブチェック、腹時計付きのギアラビット。スタンドトリガー!」

言つてる側から普通に出るなよ……。しかも、スタンドトリガーなら、攻撃の終わつたりアガードをスタンドするトリガー……。今は使えない。

「ガンナーギアをスタンドして……パワーも一応与える。(17000) ターンエンド」

カズキ：ダメージ0 ユウキ：ダメージ0

「バニラのスタンドトリガー……。トライアルデッキ弄ったくらいか？」

「言っただろ？俺は初心者なんだ。デッキのことは、あんまり期待しないでほしいね」

「そんな奴がネクステージ？強いカード持ってたら強くなれるわけじゃねえんだぜ？」

「別に無理に強くなるつもりじゃない。俺は、ただネクステージがほしいんだ」

「……？」

ネクステージと言えば、今のギアクロニクルにとつて強力なカード。初心者が強くなるための近道として集めるものかと思っていたが、何か違う。

(奴なりに、ネクステージじゃないといけない理由があるってことか？)

「ユウキ……だったか。あんたのターンだよ」

「おっ、そうだった。俺のターン！ドロー、ヒートブレード・ドラグーン(9000)にライド！」

当たり前だけど……順当にライドしてるな。

「ハープリングアの前にボルテージホーン・ドラゴン(9000)をコール！ヒートブ

リードで、ウルニギンにアタック！（9000）」

「スチームメイデン ウルルでガード！」

「……ウルル、か。今のは、俺だったらガードするのにギアラビットを使ったな。公開済みの手札を残せば、後々シールド値の目星をつけられやすくなるぜ？」

「……あつ」

普通にガードするだけでも、先のことまでイメージしないといけないのか。奥が深いんだな、ヴァンガードって。

「なるべく公開済みのカードからガードに使う。優しい俺から初心者君に、アドバイスってとこだな！」

「言葉の言い回しに悪意を感じるのは、気のせいか……？」

「何のことですかね？初心者君？ドライブチェック、マイティボルト・ドラグーン」

何か、煽られているみたいだな……。ま、トリガーが出なくてよかった。

「ハーブリンガーのブースト、ボルテージホーンでアタック！（14000）」

「ここは……ノーガードするか。ダメージチェック、グリマーブレス・ドラゴン」

「ターンエンド」

カズキ：ダメージ1 ユウキ：ダメージ0

「今度はこつちの番だな。俺のターン！スタンドアンドドロ！スチームファイターアンバー（9000）にライド！」

「アンバー……とことんトリアルデッキだな」

「続けて、スチームナイト カリブム（8000）をコール！」

「つて、おい！そいつを入れてるのかよ!？」

そこまで驚くカード……なのか？確かスキルは……ああ、そういうことか。

「カリブムのスキル。ハープリンガーをデッキの下に戻す。その後、戻したカードのグレードマイナスのカードをコールするけど……」

「ヴァンガードにねえよ！そんなカードは！」

「つてわけで、一応デッキをシャッフルしてくれよ。スキルでデッキは確認するっぽいし」

なるほど。このカードはこういう使い方をするんだ。覚えておくか。

「終わったぜ。次は？」

「カリブムの後ろにラッキーポット・ドラゴキッド（4000）をコール！ガンナーギアのブースト、アンバーでアタック！（14000）」

「ノーガード！」

「ドライブブチエック……スチームメイデン エルルだな」

ダメージにはなるかみの守護者、完全ガードのユニットであるドラゴンダンサー アナスタシアが入る。ラッキーだ。

「ラッキーポットのブースト、カリブムでアタック！（12000）」

「サンダーシャウトでガード！序盤からダメージはやらねえよ！」

「くつ、ターンエンド！」

カズキ：ダメージ1 ユウキ：ダメージ1

「俺のターン！スタンドアンドドロロー！」

次でグレード3。行動の幅が一気に増える。

「へへ、行くぜ。食らえ！障壁穿つ雷鳴！ライド！ドラゴニック・ヴァンキッシャー！！  
(11000)」

「おお……！」

「感心してる場合かよ？魔竜戦鬼 チャトウラ（8000）をコールし、ボルテージホーンでアンバーにアタック！（9000）」

「さっきの教訓、活かしてやる！腹時計付きのギアラビットでガード！」

ガードはなるべく公開済みのカードから。ここは助言通りにラビットを切った。

「ほお？やるな。なら、ヴァンキツシャーでアタック！（11000）」

「ここはノーガードだ！」

「ツインドライブ！1枚目、ライジング・フェニックス。2枚目、プラズマダンス・ドラゴン。クリティカルトリガー！パワーはチャトウラ（13000）クリティカルはヴァンキツシャーだ！（11000 ☆2）」

クリティカルトリガーか……。ダメージが一気に引き離されていく……。

「ダメージチェック、1枚目、引っ込み思案のギアレイヴン。2枚目、スチームバトラー  
ダダシグ。クリティカルトリガー！効果はアンバー！（14000 ☆2）」

よし、これでチャトウラのパワーは足りなくなった。アタックは通らない！

「……チャトウラで、アタック！（13000）」

「え……パワーは足りていないの？」

「残念だけどな、チャトウラにはスキルがある！こいつはヴァンガードにしかアタックできない代わりに、アタックした時だけパワープラス3000される！（16000）」

「く……」

そんなスキルがあるなんて、全然知らなかった。

「初心者のカードプールの知識のなさが響いたな！」

「今覚えたから問題ないな。それに、これからいくらでも覚えていける」

「格好つけて言うな！で、アタックはどうすんだよ!？」

「もちろん、ノーガード!」

「散々引つ張つてノーガードかよ!？」

今の手札だとガードできないんだから、仕方ないだろ……。

「ダメージは……うつ、スチームバトラー ダダシグ。またクリティカルトリガーか……」

「無駄にトリガー消費したな。ラッキー!」

「う、うるさいな!早くターンエンドしろよ」

「おっと、残念。チャトウラにはまだスキルがある」

まだ何かあるのかよ……。

「チャトウラはアタックがヒットした時、C B 1で1枚ドロ!さらに相手のドロップゾーンから、ウルルをバインド!」

「……バインド?」

「フィールドとは違う場所に置いて、そのファイトでは使えなくするスキルのことだな!」

そんなスキルもあるのか。まだまだ勉強不足みたいだな。

「これで今度こそターンエンド！」

カズキ：ダメーヅ4 ユウキ：ダメーヅ1

「ようやく俺のターンか……。スタンドアンドドロー！」

かなり離されているから……。ここからグレード3になれるし、一気に仕掛けにいく！

「時空の鼓動を呼び覚まし、未来へ羽ばたく翼となれ！ライド！クロノジェット・ドラゴン！！（11000）」

「へえ……」

「さらにジェネレーションゾーン解放！憧れを翼に変え、未来をこの手に！ストライドジェネレーション！！」

今回はさすがに馬鹿正直にネクステージにストライドはしない。勝つためには、今の俺が持つユニットだけでどうにかするしかない。

今、俺がネクステージの代わりに、ストライドしたGユニットは……

「時空竜 フェイトライダー・ドラゴン！！（26000）」



## turn 4 逆転への一手

「おかしいな……？いくら電話してもつながらない……」

日直の仕事を終えてミルキーウェイに向かうホノカは、カズキに電話をかけていた。だが、何回かけても出ない。返答もなしだ。

「ファイトでもしてるのかな……？」

いや、デツキを調整しないでファイトしているとは思えない。とすると、単純に気づいていないだけなのか。それとも。

「着いた着いた。どっちにしても、今からわかることだしね」

自動ドアが開き、私を中に引き入れる。いつもと変わらない店内が、私を安心させる。

「いらつしやい！あ、ホノカちゃん！」

「どうもです、店長！あの、カズキ君います？あつ、昨日私とファイトしてた男の子なんですけど……」

「ええ、いますよ。今、このカードを賭けて、ユウキ君とファイトしているところです」  
「このカードって……」

そこに置かれていたのは、クロノドラゴン・ネクステージ。それも3枚。

「彼が勝てば、このカードをあげると約束したんですよ」

「ええっ!? そ、そんなのいいんですか!？」

「もちろん。ユウキ君も事情をわかってファイトしてますから、そう簡単には負けないでしょう」

「ユウキ君なら、カズキ君よりも実力は上だし……。いや、それよりも!」

ファイトしているということは、今のカズキ君が使っているのは、昨日ファイトした時から変わらないあのデツキ……。

「カズキ君のデツキ知ってます? 勝ち筋が全くイメージされてない単調なデツキなんですよ? あんまり言いたくないですけど、正直寄せ集めのデツキです」

「ホノカちゃんも、なかなか辛辣なコメントするね……」

「ネクステージ欲しさにファイトしたカズキ君の気持ちはわかりますけど……今のデツキで、勝てるかどうか……」

「大丈夫です。彼のデツキがどのようなものかはわかってませんが、気合いは十分でした。自信はあまりなかったようですが、一度ファイトが始まれば、後からついてくるでしょう」

とは言っても、本当に大丈夫かな……? ?

「……ちよつと、観戦してきます」

「邪魔にならないようにね」

「わかってます。当然、アドバースもするつもりないですから」

\*\*\*

「時空の鼓動を呼び覚まし、未来へ羽ばたく翼となれ！ライド！クロノジェット・ドラゴン！！（11000）」

ネクステージを賭けたファイトは、俺がグレード3にライドしたところから再開する。

「ジェネレーションゾーン解放！憧れを翼に変え、未来をこの手に！ストライドジェネレーション！！」

この前のようにネクステージにはストライドしない。その代わりに俺がストライドするのは……。

「時空竜 ファイトライダー・ドラゴン！！（26000）」

「フェイトライダー……なかなかいいユニットだな」

「確かここで……クロノジェットのスライドスキルを発動！C B Iで、チャトウラをデッキの下に戻す！」

単体でパワー11000になり、おまけにドローできるスキルを持つチャトウラは厄介だ。消すことができて助かった。

「続けて、フェイトライダーのスキル！ラッキーポットをデッキに戻し、デッキからラッキーポットのグレードプラス1のカードを……スペリオルコール？だったな」

ラッキーポットはグレード0。つまり、グレード1のカードがコール可能だ。

「グレード1なら……こいつだ。スチームスカラー ジジ(5000)をスペリオルコール！ジジのスキルで、S B Iして1枚ドロー！」

「ソウルの損失だけで、手札を増やしてきたか……」

「さらにアップストリーム・ドラゴン(9000)をコール！そのままアタック！G B 発動で、パワープラス4000する！(13000)」

「疑心暗鬼のジンでガード！悪いけど、そんなアタックは通さねえぜ」

「くっ……でも、アップストリームのスキル！パワーを増やしてアタックした時、このカードをデッキに戻して、グレード1のカード、頂に立つギアウルフ(7000)をスペリオルコール！」

まるで、パワーを増やした代償に力を失って退化したみたいだ。

「ガンナーギアのブースト、フェイトライダーでアタック！行つけー！（31000）」  
「ここだ！ノーガード！高いパワーのユニットのアタックは、ノーガードで切り抜ける方が遥かに楽だからな！」

だから、序盤であまりダメージを受けなかったのか……。俺のダメージは4。もうノーガードできる余裕がほとんどない。

「やっぱり、奥が深いな……。ヴァンガードは」

「ん？何か言ったか？」

「何でもないよ。トリプルドライブ！1枚目、スモークギア・ドラゴン。2枚目、ニキシーナンバー・ドラゴン。3枚目、スチームメイデン ウルル。ヒールトリガー！」

よし、助かった。これで何とかダメージに余裕を持たせることができる。

「ダメージを1枚回復し、パワーをカリブムへ！（13000）」

「でも、与えるダメージは結局1。同じ1なら、こんな風にダメージを受けて、手札の消費を抑えるのも一つの手だぜ」

「なるほどな……」

「で、俺のダメージは、ジャギーショット・ドラグーンか」

トリガーじゃない、グレード3のユニット。俺はさらに追撃をかける。

「ジジのブースト、カリブムでアタック！（18000）」

「パワーが甘いな！プラズマダンス・ドラゴンでガード！」

「1ダメージだけかよ……。ターンエ——」

「カズキ君！」

やることもなくターンの終了を宣言しようとした時、聞き覚えのある声が聞こえる。ホノカさんだ。

「遅かったな、ホノカさん。今、ネクステージを賭けてファイトしてるところなんだ」

「それはさつき店長から聞いたけど……。さつきから電話してるのに出ないから心配してたんだよ？」

「……あつ、本当だ」

バイブになってたから気づいてなかった……。

「よう、ホノカちゃん。こいつと知り合いなの？」

「あつ、ユウキ君。同じ高校なんだけど、知り合ったのは昨日偶然ね。たまたまファイトすることになって……」

「へえ？偶然出会って、まだ間もない男子のことを心配ねえ？」

「そ、そういうのじゃないよ？特に何の関係もないし」

「なら、知らない間に意識しちゃってるってことかな？ホノカちゃん？」

「ち、違うって！からかうのはよくないよ！／／／」

何で顔赤くなってるんだ？ホノカさんは。

「そんなことは放っておいて……カズキ君」

「ん？」

「デツキ調整も何もしてないのに、よくファイトする気になったよな？私がレクチャーするって約束も無視して」

「ま、まあそれは悪かったよ、あはは……」

「笑つてごまかさないの」

「はい……」

俺はホノカさんを待とうとした。それだけは弁明しておく。

「仕方ないね。始まったファイトを止めるわけにもいかないから、こうなったら頑張つて勝つしかないよ！カズキ君！」

「当たり前だつて。最初からそのつもりだ」

「言つたな!?そう簡単には勝たせねえぞ！何せ、ネクステージがかかってんだしな！」

「だから負けられないんだよ。ターンエンド！」

カズキ：ダメージ3 ユウキ：ダメージ2

「俺のターン！スタンドアンドドロ！行くぜ、ジェネレーションゾーン解放！」

マイティボルトをコストに、眠れるGユニットを解き放つ。

「進む稲妻が、未来を呼ぶ！ストライドジェネレーション!!雷龍騎士　ゾラス!!(26000)」

向こうもGユニットにストライドしてきたか……。どんなスキルを持つてるんだ？

「ヴァンキツシャーのストライドスキル！CB1でカリブムを退却！そのカードをバインドだ！」

「リアガードが……！」

「ボルテージホーンの後ろにライジング・フェニックス(5000)をコール！スキルでSB2して1ドロ！」

俺の使ったジジと同じようなスキルのユニットか……。

「ゾラスで、ヴァンガードにアタック！(26000)」

「まだダメージは3だし……行けるか。ノーガード！」

「トリガー出ても知らねえぞ！トリプルドライブ！1枚目、魔竜戦鬼　チャトウラ。2枚目、ドラゴンダンサー　アナスタシア。3枚目、ヒートブレード・ドラグーン」

「出てないじゃん」

「出てないね」



「うっ、うるせえな！二人揃ってそういうこと言うな！仲良しかよ！そういうこともあるだろうが！」

一回でよくしゃべるな……。

「わかったから。ダメージチェック……お、スチームナイト シュ・シン。ドロートリガー！1枚ドロートして、パワーをクロノジェットに与える！（16000）」

「ここでトリガー引くなよ……。けどな、ソラスのスキル！アタックがヒットしたから、お前は自分のリアガードを1体選んで退却しろ！」

「何？！……ジジを退却！」

「その後、俺はお前のドロップゾーンから2枚選んでバインドする！選ぶのはジジとギアラビット！」

退却と同時にバインドまで行うのかよ……。なかなか強いな。

「ハーブリンガーがいれば、一気にパワーアップできたのよ……。そしたら、ボルテージホーンもパワーが足りたのにな……」

ボルテージホーンはブーストを含めてもパワー14000。クロノジェットは、トリガーの効果で16000になっている。アタックしてもヒットはしない。

が、ハーブリンガーがまだこの場にいたなら話は違う。ハーブリンガー・ドラゴキッドは、カードがバインドされる度にパワープラス3000する。

このターン、計3枚のカードがバインドされ、パワーは9000プラスしていたはずだ。それがどれほど強力はわかるだろう。

「まあ仕方ない。ターンエンド！」

カズキ：ダメージ4 ユウキ：ダメージ2（裏1）

「よし、俺のターン。スタンドアンドドロロー！」

さて……このターンは何にストライドしようか？ラグナクロックは使えないみたいだし、かと言ってネクステージも……。

「……………」

いや、決めた。

「ジェネレーションゾーン解放！憧れを翼に変え、未来をこの手に！！ストライドジェネレーション！！」

グダグダ迷うくらいなら、こいつで……行く！！

「……クロノドラゴン・ネクステージ！！（26000）」

スキルがどうか、関係ない。俺が使いたいと思うユニットを使うだけだ。

「カズキ君……ここでネクステージにストライドするの……？」

「ネクステージ!? おま、持っていないんじゃないかよ!?」

「誰がそんなこと言ったんだよ」

(やべえな……。このタイミングでネクステージなら、一気に押しきられるぞ)

思わぬネクステージの登場にユウキは焦り、ホノカは困惑する。もつとも、ホノカはカズキのデッキを知っているからこそその考えだが。

「ストライドスキル! C B 1で、ボルテージホーンをデッキの下に戻す! さらに、ギアウルフのスキルで、リアガードがデッキに戻ったとき、パワープラス3000! (10000)」

「くそ……。ただでさえリアガードが少ないのによ!」

「ギアウルフの前にスチームナイト プズル・イリ (9000) をコール! さらにラツキーポット・ドラゴキッド (4000) をコールし、スキルで自身をソウルに入れてプズル・イリにパワープラス3000! (12000)」

(プズル・イリ! そんなカードを入れてるのかよ……。デッキ弄っただけと思つたら、不意打ちで強力なカード出てくるし……。初心者のデッキは、よくわからねえな……)

プズル・イリは、強力なガード制限のあるユニット。そこにネクステージが加わることで、ユウキは悩み始める。

「ガンナーギアのGB。C B 1し、自身をソウルに入れてデッキのスチームファイター

バリフを手札に加える」

「次のストライドのコストを確保したんだね……。さ、どうなるかな？」

「行くぞ！ネクスステージで、ヴァンガードにアタック！（26000）」

「く……」

（ネクスステージには、ハーツ状態のクロノジェット・ドラゴンをスタンドして再アタックできるスキルがある。しかも、クロノジェット・ドラゴンのスキルを考えると……）

クロノジェットには、アタックした時にGB2を満たすことでパワーを5000上げ、さらにグレード1以上のカードを手札からガードに使えなくする。

ガードにはグレード0のみしか使えなくなり、おまけにツインドライブもある。ネクスステージと合わせて5回のドライブチェックができるため、トリガーを引き、そのままゲームエンドまで押しきることも可能だ。

が、ユウキが悩むのはプズル・イリがいるから。プズル・イリはアタック時、SB2することでグレード0のガードを封じる。

クロノジェットと合わせて、二重のガード制限が待っている。

（ここは……クロノジェットのアタックを放棄する！ガードするのは、プズル・イリかネクスステージ……）

ユウキは慎重に手札と相談し、決断を下した。だが、ユウキはミスをした。と言うよ

り、そもその前提条件をユウキは知らない。

カズキがネクステージのスキルを使えることなど、100%あり得ないことを。

「ドラゴンダンサー アナスタシアで完全ガード！コストは愛の神 カーマー！」

「……あつ」

「ん？どしたの、ホノカちゃん？」

「あ、いや何でもなーい。カズキ君、ドライブチェックして？」

ホノカはユウキの狙いに気がついたが、口出しはしない。カズキのデッキを知るからこそ、この選択が間違いだとわかっているから。

ただ、カズキは気づいていなかったが。

「よし、トリプルドライブ！1枚目、ドキドキ・ワーカー。クリティカルトリガー！効果はプズル・イリ！（17000 ☆2）2枚目、万里を駆けるギアホース。3枚目、クロノジェット・ドラゴン」

「ち……クリティカルをプズル・イリに乗せたかよ。けどな、それを見越してここをガードしたんだ！今ダメージを受けて後2回、それもガード制限付きのアタックをガードできる自信なんてないからな！」

それがユウキの狙い。追撃をノーガードすることを選んだ。

だが……当然のように、カズキはすつとんきような反応を見せる。

「後2回？プズル・イリしかないけど」

「……は？ネクステージのスキルを使つて、クロノジェットを再アタックできるようにすれば、後2回じゃねえかよ」

「あつ……あー、えつと……俺、ネクステージ1枚しか持つてないんですよ……」

「……え？」

「ここで、二人が今の状況に気づく。カズキは、ユウキがネクステージのスキルを使うと見越してガードしたことに。ユウキは、自分の勘違いで不要なガードをしてしまったことに。」

「あーあ。カズキ君がネクステージ出すから、変な勘違いしちゃったじゃん」

「この流れは完全にネクステージのスキル使う感じだろ!?それが、持つてないですだつて!?何を紛らわしいことしてんだよ!」

「誰がスキル使えるだけ持つてるつて言つたんだよ。それに、だつたらどうして俺はネクステージ賭けてファイトしてるんだよ」

「……言われて見ればそうじゃねえかあ!何やつてんだよ俺は!」

「あはは……御愁傷様。カズキ君も、ここでネクステージ使わなくてもよかつたのに」

「使いたいカードを使つただけなんですけど……何で責められないといけないんですかね?」

と、とにかくラッキーだった……ってことかな？

「ち、ちくしょう！無駄にシールド消費してしまったじゃねえかよ！」

「でも、こういう勘違いがあるように、何が起るかわからないのがヴァンガードだよ  
ね」

「ホノカちゃん、綺麗にまとめなくてもいいんだけど！」

「勘違いするユウキ君もユウキ君だよね」

「あくまでもこいつの肩を持つのかよ……。いいとこ見せようとしやがって！」

「い、いや違うからね!？」

そこまで否定されると、何だか悲しいんだけど。でも、いいとこってどういうことだよ？

「あの……続けても大丈夫です？」

「お、そうだったな。早いとこ残りのアタック済ませろよ」

「ギアウルフのブースト、プズル・イリでアタック！プズル・イリのスキル、SB2で、このアタックはグレード0でガードできなくする！（27000 ☆2）」

「ノーガードだよ！ダメージチェック、1枚目、愛の神 カーマ。ちつ、ヒールトリガー  
かよ。回復できねえし、パワーだけヴァンキッシャーに。2枚目、プラスマダンス・ド  
ラゴン。ちよ、ここでトリガー引くなよ！」

よし！トリガーを2枚使わせた！それも、1枚はヒールトリガーだ。さつき完全ガードのコストに捨てたカーマと合わせて2枚。残りのヒールトリガーは後2枚か。

「俺はこれでターンエンド！」

カズキ：ダメージ4（裏2） ユウキ：ダメージ4（裏1）

「俺のターン、スタンドアンドドロロー！ジエネレーションゾーン解放だ！」

ヴァンキツシャーが手札から捨てられる。次は一体、何で来る？

「逆る稲妻が、未来を呼ぶ！ストライドジエネレーション！！征天覇竜 コンクエスト・ドラゴン！！（26000）」

「ここでコンクエストか……。カズキ君、ちよつとピンチかも？」

「さつきは痛い目見せてくれたな！これで決めてやるぜ！ヴァンキツシャーのストライドスキル！CBIでプズル・イリを退却してバインド！」

またリアガードが退却された。残っているのは、後列のギアウルフしかない……。

「一気にコールするぜ！魔竜戦鬼 チャトウラ（8000）とヒートブレード・ドラグーン（9000）、ワイバーンストライク ピグルマ（7000）！」

「本気で決めるつもりなんだな……」



「コンクエストのスキル！Gゾーンの名のカードを1枚表にして、相手の前列のリアガードを1体退却！」

くそ……また退却かよ。って、あれ？

「俺の前列にリアガードいないけど」

「そんなのわかってんだよ！この効果発揮後、ユニットのいない相手の前列のリアガードサークル1つにつき、俺の前列のユニットのパワープラス5000！」

「何!? ってことは、俺の前列にはリアガードがないから……」

「2つで合計パワープラス10000だ！（コン 36000）（チャ 18000）（ヒート 19000）」

マジかよ……退却とパワーアップを同時に行えるなんてな……。

「行くぜ！コンクエスト・ドラゴンでアタック！こいつで終わらせてやるよ！初心者!!（36000）」

俺は手札を見る。シールドは十分だが、全てを防ぐには足りない。ダメージは4だし、1つはノーガードで通せる。

だとすると、どこをノーガードするか。このアタックは36000。ドライブチェックまであるとなると、必要なシールドは計り知れない。

他のアタックはパワーは低めだ。……いや、コンクエストに比べたらっただけで、火

力としてはかなり高い。

だったら……。

「ノーガードだ!!」

「いいのか？お前のダメージは4。もし俺がここでクリティカルトリガーを引けば……」

「わかってる。その上でノーガードしたんだ」

「初心者のかせにいい度胸じゃねえか。トリプルドライブ！1枚目、ジャギーショット・ドラグーン。2枚目、マイティボルト・ドラグーン」

「ここまではトリガーなし。次で出なかつたら、このターンは耐えられる。」

「うおい！トリガー出ろよ！千載一遇のチャンスだろ!？」

「初心者だからって甘く見たツケが今来たな」

「関係ねえよ！初心者に変わりないだろ！」

「言えてるかも。プレイングは少し改善されてるけど」

「2人揃って同じ事を言うなよ……」

でも、ホノカさんに褒めてもらった。進歩はしているみたいだ。

「とにかく、これでラストだ！3枚目！」

勢いよくドライブチェックを行う。勝敗を大きく左右するそのカードは……。

「……毒心のジン。クリティカルトリガー！」

「くっ……！」

「パワーはチャトウラ（23000）クリティカルはコンクエストだ!!（36000

☆2）」

これで2ダメージが確定。ダメージ4の俺は、このダメージを受けてしまうと敗北が決まる。

唯一免れる方法は、ヒールトリガーを引くこと。ユウキのダメージは4。どちらかのダメージチェックで引くしかない。

「ダメージチェック……1枚目、スチームメイデン ウルル。ヒールトリガー！ダメージを1枚回復し、パワーをクロノジエツトへ！（16000）」

「ちっ、運のいい奴だな！」

「2枚目、スチームメイデン アルリム。トリガーはなし」

危ねえ……。首の皮1枚で繋がった。

「ふん！けど、こつちにはまだアタックが残ってるんだよ！ピグルマのブースト、ヒートブレードでアタック！ヒートブレードのGBで、パワープラス3000！（29000）」

「まだまだ！ウルルとギアホースでガード！」

「ライジング・フェニックスのブースト、チャトウラでアタック！チャトウラのスキルでパワープラス3000！スキルも得る！（31000）」

「邯鄲の夢のギアキャット2体でガード！」

「トリガーのパワーアップが響いたか……ターンエンド！」

カズキ：ダメージ5（裏1） ユウキ：ダメージ4（裏2）

「俺のターン！スタンドアンドドロロー！」

さて……どうするか。ネクステージは使ったし、残りのGユニットを考えると、決め手になりそうなのがない気が……。

（……ん？待てよ？）

俺は盤面を確認する。ダメージの枚数、ドロップゾーンにバインドゾーン。そして……互いの手札の枚数。

（あいつのスキルって、上手くいけば使えるんじゃないか？）

最初はよくわかっていなかったが、今ならわかる。あのユニットに秘められた可能性を。

「バリアをコストに……ジェネレーション解放！憧れを翼に変え、未来をこの手

に！ストライドジエネレーション!!」

この状況だからこそ、活かせるかもしれない一手。それを今、解き放つ。

「時空竜 ミステリーフレア・ドラゴン!! (26000)」

「ここでそいつかよ……!!」

「でも、ミステリーフレアのスキルって……」

ミステリーフレアには、他には類を見ない強力なスキルを持っている。決まれば絶大の威力を誇るが、発動条件が厳しい。

けど、俺はこいつに賭ける。他に有効な選択肢がないなら、少しでも可能性のある方に進むだけだ!

「ギアウルフの前にクロノジェット・ドラゴン (11000)、空いている列にスモークギア・ドラゴン (10000) とドキドキ・ワーカー (4000) をコール!」

「ちっ、一気にコールしてきたな……」

「ドキドキ・ワーカーのブースト、スモークギアでチャトウラにアタック! (14000)」

「……ノーガード!」

インターセプトは潰せた。ミステリーフレアのスキルを狙うには、必要な下準備だ。

「ミステリーフレアでアタック! ドキドキ・ワーカーのスキルで、名前にクロノジェット

を含むグレード3以上のヴァンガードがアタックした時、自身をソウルに入れて1枚ドロ―！ミステリーフレアにパワープラス5000！（31000）」

「ジン！マイティボルト！サンダーシャウトでガード！ヒートブレードでインターセプトするぜ！」

向こうのシールド値は、これで25000。ヴァンキツシャ―のパワーと合わせると36000。

「トリガー1枚で突破か……。さっきの状況と少し似てるね」

「このアタックだけは、通すわけにはいかねえからな！方が一つて事もある！」

その方が一を信じて……。トリガーを引く！

「トリプルドライブ！1枚目、フェイトホイール・ドラゴン。2枚目、スチームナイト  
プズル・イリ。3枚目、スチームナイト シュ・シン。ドロートリガー！1枚ドロ―し、  
パワーはミステリーフレアへ！（36000）」

よし、アタックヒット！これで第一条件クリアだ。

「ちつくしよ……。ダメージチェック、疑心暗鬼のジン。ドロートリガー！こつちも  
1枚ドロ―して、ヴァンキツシャ―にパワーだ！（16000）」

「ミステリーフレアのスキル！アタックがヒットした時、デツキの上から4枚を公開！  
それらのカードが全て異なるグレードなら、追加のターンを得る！」

つまり、グレード0から3のカードを、被ることなく引かなくてははいけない。かなりの博打だが、それに見合うだけの結果は待っている。

エクストラターン。相手の反撃を待つことなく、攻撃をやり直すことができるこのスキルは、どのようなゲームにおいても強力に違いない。

「でも、そんな事できるの……？カズキ君のデッキは元からグレードバランスがおかしいし、ファイトが進んでデッキのカードも少なくなってるし……」

「行くぞ。1枚目……スチームファイター アンバー」

グレードは2だ。

「2枚目……腹時計付きのギアラビット」

グレード0。ここから、難易度が一気に増していく。

「3枚目……メーザーギア・ドラゴン」

グレード1。後は……グレード3を引くことが出来れば、このスキルは成功する。

「まさか、本当に引いてしまおうんじゃないだろうな……!?」

「カズキ君……!」

「4枚目……!」

祈りを込めて、カードを捲る。固唾を飲んで見守る中、表れたユニットは……。

「クロノジェット・ドラゴン。グレード3!」

「……………何!？」

俺に幸運をもたらしてくれたのは、ネクステージの前身であるクロノジェット・ドラゴンだった。

「条件達成! スキル発動! C B 4で、俺は追加のターンを得る!!」

「凄い……………まさか、成功するなんて……………」

「でも、まだ俺のターンは終わってない! ギアウルフのブースト、クロノジェット・ドラゴンでアタック! (18000)」

「追加ターンが決まってる上に、手札1枚じゃガードする気にならねえよ! ノーガード! ダメージチェック、愛の神 カーマ」

あつ、あのユニットって……………。

「何でヒールトリガーが出るんだよ! 嫌でもエクストラターンに行きたいのか!？」

「スキル決まってるなかったら、次のユウキのターンで負けてたな……………。ターンエンド」

カズキ：ダメージ5 (裏5)    ユウキ：ダメージ5 (裏1)

「でも、次はまた俺のターンだ」

「わかってんだよ! 嫌味か!」



「へいへい。俺のターン！スタンドアンドロー！フエイトホイール・ドラゴン（1100）と、スチームナイト シュ・シン（5000）をコール！」

追い討ちとばかりにリアガードをコールする。ユウキにとっては酷だ。

「とどめだ！クロノジェット・ドラゴンでアタック！GB2発動！アタックした時、パワープラス5000！このアタックはグレード1以上でガードできない！（16000）」

「そんなもん……ノーガードに決まってるだろお!?!」

ドライブチェックを行うまでなく、ユウキはダメージチェックを始める。ドラゴニック・ヴァンキッツシャー。トリガーではなかった。

## turn5 チームメイト

昼休み。俺はホノカさんのクラスの教室で一緒に昼御飯を食べていた。他愛のない話をしている俺は、何時にもなく気分がいい。

「上機嫌だね？カズキ君」

「そりゃ、ネクスステージが手に入って、本当の力を発揮できるようになったからな！誰でもいいからフアイトしたいぜ！」

机の上に並べられた4枚のネクスステージ。俺の気分がいいのは、これが理由だ。

「新しいデツキも組んだことだしね。最初のデツキに比べたら、かなりまとまったデツキになったよ」

「何と言うか……統一感ができたよな」

これまでは、ユニットの種類もバラバラに入れていたが、ホノカさんにも手伝ってもらい、使いたいユニットを絞り込んだ。

スキルやコンボにも考慮し、勝ち筋を見出だす。ユニットが決まったら、デツキとしての形に仕上げていくだけだ。

と、そんな感じで組んだ俺のデツキは、ホノカさんの目から見ても悪くないみたい

だった。

「デツキの話もいいんだけど……昨日の話、覚えてる？」

「ミルキーウェイでの話か？」

「そうそう。その話」

俺の脳裏に、昨日の出来事が甦る。それは、ユウキとのファイトに勝利し、ネクステージを受け取ってからのことだった……。

\*\*\*

「はい、どうぞ。約束通り、このカードはあなたの物です」

「や……やった！本当にありがとうございます！ごさいます！」

俺に手渡される3枚のネクステージ。本当に、俺の物になるんだ……！

「喜んでくれたなら何よりです」

「ふえ〜太っ腹ですね、店長」

「……断腸の思いですけど」

何か申し訳ないな……。

「くっそ〜！負けた!!あんな土壇場でミステリーフレアのスキル決めるか普通!?!」

「カズキ君の運がよかつただけじゃない?」

「何だよホノカさん。それだと、俺がまぐれ勝ちしたみたいに聞こえるな」

「あれ?そうじゃないの?」

「これでも頭使って頑張ったんだけどな……」

後半は博打だったけどな。特にミステリーフレアのスキルは、信じてカードを捲ることしかしていない。

「カズキ君はよく頑張りましたよ。そうだ。カズキ君は、大会には出る気はありますか?」

「シヨップ大会ってことですか?」

「あつ、そういうことじゃないんですよ。これから5ヶ月、もう11月ですから4ヶ月後ですか……3月にある大会があるんですよ」

3月?まだまだ先の話だな。

「あ……そうだった。ヴァンガードの全国大会『ウェルテクスカップ』が開催されるんだったね」

「何だよホノカちゃん。まさか、忘れてたってことないだろ?」

「えっと……正直言うと、忘れてました……。チームメイトとかいないし、私にとっては無縁なものだったから」

チームメイト……ってことは、その大会は団体戦なのか。

「あ……カズキ君が話についていけないよね。ごめん」

「いや、大丈夫だよ。でも、とりあえずその……ウエルテクスカップ？について説明してほしいんだけど」

初耳だから全くわからない。かなり大規模な大会みたいだし、どんなものなのか知っておきたい。

「じゃあここは真島ユウキ様が、ウエルテクスカップについてざっくり説明してやるよー」

「お前が説明するのかよ」

「それくらい別にいいだろ！ウエルテクスカップってのは、年に2回開催される全国大会のことだな」

へえ……。全国大会か。スポーツみたいなのに、ヴァンガードにもそういうのがあるんだな。

「3人1組のチームを組んで参加することが条件だ。性別とか年齢は関係ないな。で、大会は3日間あって、1日目に参加チーム総当たりの予選。2日目に予選を勝ち上がった

たチームでトーナメント。3日目に上位チームで決勝トーナメントを行うってとこだ」  
「なるほど……」

「チームの勝敗については、1日目と2日目以降で違ってくるんだが、それは今はどうでもいいな。とにかく、3人でチームを組んで全国のファイターと戦う。それがウエルテクスカップだぜ！」

特に複雑なルールもないし、わかりやすいな。ウエルテクスカップ……参加してみたい。

「それで、さっきの話に戻りますけど……参加する気はありますか？」

「話聞いてて、ちょっと興味持ったかもしれないです。俺、参加したいですー！」

「だったら、私とチーム組まない？私、そういった知り合いとかいなかったから、出てみたいって思ってたんだ。喜んでチームに入るよ！」

「えっ、本当か？」

「うん！チームとして、これから改めてよろしくね！」

ホノカさんがチームに入ってくれた。残るは後1人だ。その候補は、目の前にいる。

「ユウキ。お前も一緒にチームに入ってくれないか？」

「パスだ。俺はチームに入るつもりなんてねえよ」

「え。ダメなのか？」

「俺は自分のチームをもう組んでんだよ。悪いけど、お前とチームは組めないぜ」

そういうことかよ……。それなら仕方ないか。

「後は頑張りな。まだ時間はあるし、3人目のチームメイトを見つけることだな。んじや店長、俺は帰ります」

「ありがとうね、ユウキ君。またのご来店をお待ちしてますよ」

軽く手を振って店を出るユウキ。これが、昨日の出来事だ。

新しく出来た目標。そのために必要な、もう1人のチームメイト。俺たちは一緒に戦ってくれる誰かを探し出さなくてはいけなかった。

\*\*\*

「で、チームメイトをどうするかなんだけど」

「だよな……。でも、この学校にヴァンガードしてる奴なんて他にいるのか？」

「二応、知り合いに声はかけてみたんだけど、ダメだったよ。ヴァンガードしないかって話も持ちかけてみたけどね……」

収穫なしか。これは困ったな。

「俺の方もダメだった。となると……シヨップで地道に声かけるのが無難か？」

「うん……。確實だけど、遊び半分に参加する人とかいるかも。カズキ君だって、やるからには本気で勝ちにいきたいでしょ？」

「確かに……」

手詰まりだ。まだ時間があるとは言っても、このペースで大丈夫だとは思えない。

「一応、放課後にシヨップに行ってみようか。何かしらの発見があるかもしれないし」

「そうだな。そろそろ時間みたいだし、俺戻るよ」

「うん。また放課後にね」

机に広げていたネクステージをデツキケースにしまい、カズキ君は教室を出ていった。

「……………」

カズキ君の気持ちに乗ってチームに参加したのはいいけど、上手く見つかるかな？ カズキ君との出会いだって、偶然みたいなものだったし……。

「男子と2人でお弁当なんて、羨ましいですな〜ホノカ？」

「うわっ!?!アカリ!?!」

いつの間に……。さっきまで、他の女の子とおしゃべりしてなかったっけ？



「結構いい感じの子じゃん。馴れ初めはどんな感じだったの？ん〜？」

「ちつ、違うから！アカリが思ってるような関係じゃないよ！」

「思ってるって……ホノカはどんな関係だと思ってるわけ？」

「そ……それは……／／／」

絶対からかっている。私の口から『恋人』だとか『カップル』だとか、そんな意味合いの言葉を言わせたいだけだ。

「とにかく違う！ただのチームメイトだよ」

「チームって……ヴァンガードの？」

「そうだよ。私からお願ひしたんだ」

「積極的なアプローチですか？」

「だから、違うー！」

本当に違うのに……。別に、私はカズキ君のことをそんな風に見ているわけじゃないのに……。

「……でも、よかったねホノカ」

「え？」

「仲間できたじゃん。ヴァンガードの」

「……ありがとう」

ずっと言い続けてきたからね。きつと、見ている方にも心配だとかさせたかもしれない。だからこそ、今のような言葉が出たと思う。

「で、告白はいつするの？」

「……っ！だから！」

\*\*\*

休み時間の終わるチャイムが鳴る。確か、次はホームルームだったはずだ。俺は自分の席に座り、担任の先生が来るのを待つ。

程なくして、教室に先生が入ってくる。その手に一枚のカードを持って。

（あれって……ヴァンガードのカード？Gユニットみたいだけど……）

何のユニットかはわからない。それに、先生がカードを持っている理由もわからない。

「早速ホームルームを始める。が、その前に……このカードを落とした奴はいないか？この学年の廊下に落ちていたらしいが」

なるほど、そういうことか。カードは……破壊神獣 ヴァナルガンド？見たことない  
ユニットだ。

「はっ、はい。私の……です」

（あの子って……）

おどおどしながら手を挙げたのは、あまり前に出ない内気な少女。立ち上がり、前に  
出てくる彼女の名前は……

「そうか、西野のカードだったか。よかったな。これからは気をつけるよ？」

「はい……。あ、ありがとうございます」

西野マオ。俺の後ろの席だから、名前は覚えていた。けど、話したことは全然ない。  
って言うかあの子、ヴァンガードしてたんだ。大事そうにカードをもらい、自分の席  
に戻っていく。

「では連絡事項を伝えるぞ。まずは、授業変更についてだが……」

ん？待てよ。この子、ヴァンガードしてるんだよな……？

「それと、英語の授業の補足プリントがあるみたいだから、英語係の人は後で職員室に行  
くように」

もしかしたら、彼女が俺たちのチームに入ってくれるかもしれない……。ホームルー  
ムが終わったら、話してみるか。

「以上でホームルームは終わりだ。各自、次の授業の準備をしておくこと」

担任の先生が教室から出ていく。教室にはざわめきが戻り出す。話すなら、今がチャンスだ。

俺は後ろの西野さんの席に首を向ける。静かに教科書を鞆から出しているところだ。

「あの……西野さん。ちよつといいかな？」

「……え？私、ですか？」

自分が話しかけられたことに一瞬気づいていないようだった。軽く無視されたのかと思つた。

「あ、ごめん。いきなり声かけたから驚いたよな。実は、少し聞きたいことがあつてさ」

「あ、はい。何でしょうか？」

「さっきのカード、ヴァンガードのだよな？」

「はい。これですよね？」

破壊神獣 ヴァナルガンド。間違いない。さつき見たカードと一緒にだ。

「気づいた時には無くしてしまって、焦つてたんですよ。それで、このカードがどうかしたんですか？」

「いや、西野さんもヴァンガードしてたんだって思つてさ。俺も、ヴァンガードしてるんだ」

「えっ!? 戸坂君、ヴァンガードしてるんですか!？」

興奮で大声を上げ、ガタリと音を立てて立ち上がる。今までこんなに感情を表にした西野さんを見たことがなかったから、俺は驚いている。それは、周りもそうだった。

「あ……」

「えと、西野さん。一旦座ろうか……」

「は、はい。すみません……／／／」

顔を真っ赤にして座り込む西野さん。物珍しそうに向けられる視線に耐えられないのだろう。

「ご、ごめんなさい。つい興奮して……」

「いや、わかるよその気持ち。この学校って、あまりヴァンガードしている人いないしさ」

「そうですよね。世間では有名なのに、この学校ではカードを見ることもないですよね」  
「あ、でも違うクラスにヴァンガードをやってる奴はいるぞ。って言っても、女子1人だけなんだけど……」

「女の子がやっているんですか!？」

また気持ちが先走り、興奮して俺の席に身を乗り出してくる。そのことがきつかけで、収まりかけていた注目をまた集めてしまう。

「だから、落ち着こう」

「は、はい……／＼／＼」

この様子だと、西野さんもホノカさんみたいに一人でヴァンガードしてたんだろな。そこに現れた同じヴァンガード仲間。喜ばないわけにはいかない。

「そうだ。もしよかつたら、放課後に一緒にシヨップに来ないか？ミルキーウェイってところなんだけどさ、その女子と約束してるんだ」

「えっ、私も行っていいんですか？」

「ああ。そいつも歓迎するよ。それに、西野さんとファイトしてみたいしな」

「本当ですか！ありがとうございます！」

また注目を浴びてしまっているが、本人は深々と頭を下げているので、視線には気づいていない。

その代わり、西野さんの前にいる俺に注目が集まってしまい、俺が恥ずかしい。

まあ、いいか。新しいヴァンガード仲間にも出会えたことだし、こうしてファイトの約束も取りつけたわけだし。

チームのことについて話を切り出すのは、清水さんと合流してからでも遅くはない。まずは、せつかく出会えたヴァンガード仲間と仲良くなることから始めたいしな。

\*\*\*

「へへえ。カズキ君のクラスに、こんな子がいたんだ」

「そうなんだ。知ったのは偶然なんだけどさ」

そして放課後。俺は西野さんを連れてミルキーウェイに向かう。その途中、俺たちはヴァンガードの話や学校の話について色々話した。

普段は静かなだけで、話すと案外面白い人なんだとわかった。話は振ってくれるし、相槌は打ってくれるし。

で、今はホノカさんに西野さんを紹介している。

「は、初めまして。西野マオです」

「そんな畏まらなくてもいいよ。私は清水ホノカ！女の子のヴァンガード仲間ができて嬉しいよ！これからよろしくね！」

「は、はい！よろしく、清水さん！」

「ホノカでいいよ。私もマオちゃんって呼ぶから」

「じゃあ……よろしく、ホノカさん！」

この二人も仲良くなったみたいだ。よかったな、女の子の仲間ができて。

「ところでカズキ君。ちよつといい？」

「うん？何だ？」

俺はホノカさんに手招きされて、西野さんからは聞こえないように小声で話し出す。  
てか、顔近いな。

「カズキ君があの子を連れてきたのは……チームの3人目のメンバーのため？」

「それもあるけど、今日は西野さんをホノカさんに紹介したかったんだ。まだ時間もあ  
るし、まずは仲良くなってからでも遅くないだろう？」

「うん。あの子とは仲良くなれそうだし、一緒にチームになりたいかも」

知らない人に声をかけてくよりは、同じ学校の奴とチームを組む方がいい。その方が、  
楽しいチームになるだろうし。

俺への確認を終えたホノカさんは、西野さんにある提案を持ちかけた。

「あ、そうだ！せっかくだから、私とヴァンガードしない？どんなファイトするのか、見  
てみたいし」

「今日はデツキ持つてるんだな？」

「私が毎日デツキを忘れる訳じゃないんだよ!？」

むきになるなよ。少しからかっただけじゃないか。



「はい！でも、その前にカズキ君とファイトの約束をしていて……」

「そうなの？」

「ああ。新しいデッキを試してみたくてさ」

俺にとつては初めてのまともなデッキだ。使い勝手がどこまで違ってくるのか、確かめてみたい。

それに、相手は今日仲良くなったばかりのクラスメイトだ。ファイトについては未知数。どれほどの実力なのか、知っておきたかった。

「わかった。私は、2人のファイトを観戦していいようかな」

「オツケー。じゃあやるか、西野さん！」

「マオでいいですよ。えつと……カズキ君、ですよね？」

「ああ。改めて……やるか、マオさん！」

ファーストヴァンガードを場に伏せ、デッキから5枚引く。

こうして手札を見ると、前とは全然違うな。見慣れないカードばかりだ。使い方とか、ちゃんと覚えていかないとな。

「準備はいいですか？」

「いつでも大丈夫。行くぞ？」

「はい！」

「スタンドアップ！ヴァンガード！！」

## t u r n 6 竜は二度吠える

「スタンドアップ！ヴァンガード!!」

偶然知り合ったマオさんとのファイト。俺の新デッキの初陣は、どんな形になるのか。

「ガンナーギア・ドラゴキッド！（5000）」

「革の戒め レージング！（5000）」

ジェネシス……。ヴァナルガンドのカードにも書いてあったな。どんなクランなんだ？

「ギアクロニクルなんですネ」

「俺がヴァンガードを始めるきっかけになったカードが、このクランなんだ」

「そうだったんですね。では、私のターン。ドロ、神界獣 ハティ（7000）にライド！レージングは先駆で左後ろに。ターンエンドです」

さあ、行け。俺の新しいデッキ！

「俺のターン、ドロ！頂に立つギアウルフ（7000）にライド！ガンナーギアは先駆で後ろへ。その後ろに、スチームプレス・ドラゴン（7000）をコール！」

「早速、新しく投入したカードを使っていくんだね」

「スチームブレスのスキル！手札からグレード3を1枚見せ、デッキからクロノジェット・ドラゴンを手札に加える！」

俺は手札からバリフを公開し、デッキのクロノジェットをサーチする。

「手札に加えたら、手札のカードを1枚捨てる。俺はバリフを捨て……ガンナーギアのブースト、ギアウルフでアタック！（12000）」

「ノーガードです」

「ドライブチェック、アップストリーム・ドラゴンだ」

「ダメージチェック、ドリーミング・ドラゴン。スタンドトリガーですね。パワーはハティに加えます（12000）」

くっ……。これじゃあスチームブレスのアタックが通らない……。

「ターンエンド！」

カズキ：ダメージ0　マオ：ダメージ1

「私のターン、ドロロー。黄昏の神器　ヘスペリス（9000）にライド！」

まだグレード2。手の内はわからないか……。

「クレイマー：ハリー（6000）と、貪り喰うもの グレイプニル（9000）をコールします！ハリーのブースト、ヘスペリスでアタック！（15000）」

「ノーガード！」

ドライブブチェックでは、貪り喰うもの グレイプニルを。ダメージチェックでは、スチームファイター ウルニギンをそれぞれ引く。

「レージングのブースト、グレイプニルでアタック！（14000）」

「ノーガード。ダメージチェック、スチームメイデン アルリム」

「ターンエンドです！」

カズキ：ダメージ2 マオ：ダメージ1

「俺のターン、スタンドアンドドロ！ライド！グリマーブレス・ドラゴン！（9000）」

「ここまではどちらもあまり動きがないね……」

「スチームブレスを後列に下げて、アップストリーム・ドラゴン（9000）をコール！」

けど、動きはいい。こんなにもスムーズにファイトを進められたのは、これが初めてじゃないか？

「ガンナーギアのブレスト、グリマーブレスでアタック！（14000）ドライブ  
チェック、ドキドキ・ワーカー。よし、クリティカルトリガー！」

「いい感じだね。デツキが違うだけで、トリガーの乗りも良くなってる」

「パワーはアップストリーム（14000）、クリティカルはグリマーブレスへ！（14  
000 ☆2）」

よし、一気にダメージ2つだ！

「さつき話を聞いてたよりも、強いです……。ダメージチェック。1枚目、寵の女神  
スティア。2枚目、衰微の女神 ヘル」

「スチームブレスのブレスト、アップストリーム！（21000）」

「これもノーガードします。ダメージチェック、青春の女神 ヘーベ。ヒールトリ  
ガー！ダメージを1枚回復して、パワーも与えます！」

「回復された……。ターンエンド！」

カズキ：ダメージ2 マオ：ダメージ3

「私のターン、スタンドアンドドロロー！では、行きます！神喰らう獣を宿す、鎖の音色が  
響き合う！ライド！神界獣 フェンリル!!（11000）」

フエンリル……。それがマオさんのメインのヴァンガードか。

「貪り喰うもの グレイプニル(9000)をもう1体コール!そのままアップストリームにアタック!(9000)」

「ラッキーポットでガード!」

そう簡単にリアガードはやらせない。

「ハリーのブースト、フエンリルでアタック!(17000)」

「ノーガードだ!」

「ツインドライブ。1枚目、神界蛇 ヨルムンガンド。2枚目、戦巫女 ククリヒメ。クリティカルトリガー!パワーはアタックしていないグレイプニルに(14000)クリティカルはフエンリルに!(17000 ☆2)」

向こうも負けじとトリガーを引き返してきたな……。ダメージトリガーが出てくると、次のアタックをガードしやすいんだけど……。

「ダメージチェック、1枚目、スチームブレス・ドラゴン。2枚目、スチームメイデンウルル。よし、ヒールトリガー!」

「トリガーの引き合いだね。さつきと全く同じじゃない?」

言われて見れば……。俺もクリティカル引いて、西野さんもヒール引いたな……。

「とりあえず、ダメージ回復して……。パワーをグリマーブレスへ!(14000)」

「レージングのブースト、グレイプニルでアタック！（19000）」

「ドキドキ・ワーカーでガード！」

ガード成功。このターンは2ダメージだけで済ませることができた。

「ターンエンドです」

カズキ：ダメージ3　マオ：ダメージ3

「ここからが本番だ。俺のターン！スタンドアンドドロー！」

「張り切ってるね、カズキ君」

当然だ。このターンから、Gユニットが使えるようになるんだからな。

「時空の鼓動を呼び覚まし、未来へ羽ばたく翼となれ！ライド！クロノジェット・ドラゴン！！（11000）」

「来ますね……カズキ君の本気が」

「クロノジェットをコストに……ジェネレーション解放！憧れを翼に変え、未来をこの手に！ストライドジェネレーション！！」

進化したのは、何もデッキだけじゃない。Gユニットも、新たな力を得て強くなっている。これは、前は投入してなかった1枚。



「時空獣 アップヒーバル・ペガサス!! (26000)」

「……………ここでアップヒーバルですか!?!」

「リアガードを展開してたからな。アップヒーバルのスキル!クロノジェットがハーツにいる時、相手のリアガードを全てデッキの下に戻す!」

計4枚。それが無条件になくなるのは、かなりの痛手となるだろう。ただし、強すぎる力には代償がある。

「このスキル発揮後、相手はデッキの上から1枚ずつ、このスキルで戻したりアガードの枚数分だけ見てコールする!」

簡単に言えば、不確定なりアガードの入れ替え。別に数が少なくなるわけではないし、使いにくいスキルかもしれない。が、

「1枚目、黄昏の神器 ヘスペリス。左前列にコールします!2枚目、バンピング・バツファロー。フェンリルの後ろに!3枚目、青春の女神 ヘーベ。右後列!4枚目、クレイマー・ハリ。左後列です!」

相手のリアガードを弱体化することができる可能性を秘めている。トリガーをコールさせれば、不発に終わることだって可能だ。

「ダメ押しでクロノジェットのストライドスキル!C B 1で、ヘスペリスをデッキの下へ!」

「ふええ!?!こ、これじゃあ、まともなりアガードがないですよ!」

「ちよつとカズキ君?新しいデツキだからって、ちよつと調子に乗りすぎじゃない?」  
「何で怒られないといけないんだ!?!」

俺は自分の思うようにファイトしてるだけなのに、何か納得いかないんだけど。

「マオちゃん、こんな奴に負けないでね!私、マオちゃんのこと応援するから!」

「いや、ちよつと待てよ!?!俺のことは!?!」

「頑張ろうね、マオちゃん!」

「あ、えつと……?」

無視かよ!俺の味方はいないのか!?

「わ、私はその……カズキ君のことも応援してますから!」

「敵に応援されるって、どんな状況なんだよ……」

「あんな鬼畜なプレイングをいきなりするからだよ」

「だから、悪気があるとかじゃないだろ!?!こういうアクシデントも含めてのファイトじゃないのか!?!」

俺はそう思ってるから。だから、ファイトは楽しいんだとも思ってる。

「くつ……いいよ、わかったよ!こうなったら、孤軍奮闘してやる!ガンナーギアのGB  
!CB1、自身をソウルに置き、バリフをデツキから手札に!」

俺だって、進化したデッキを使いこなしたいんだ。このファイト、勝ってやる!!

「アップストリーム・ドラゴン（9000）をコールし、そのままアタック！アタック時にGB発動！パワープラス4000する！（13000）」

「ハティでガード！」

「くっ……けど、アップストリームはGBを発動した時、このカードをアタック終了時にデッキに戻して、代わりにグレード1のカードをコールする！」

ただし、この効果でコールされるユニットは、レストしての登場だ。アタックには参加できない。

「俺は頂に立つギアウルフ（7000）をヴァンガードの後ろにスペリオルコールして……次！アップヒーバル・ペガサスで、フェンリルにアタック！（26000）」

「ここは……ノーガードです！」

「トリプルドライブ！1枚目、スチームメイデン アルリム。2枚目、スチームファイター アンバー。3枚目、スチームファイター マシユダ。クリティカルトリガー！」

よし、トリガーゲット！しかもクリティカルだから、与えるダメージが増える！

「パワーはアップストリーム（14000）クリティカルはアップヒーバルへ！（26000 ☆2）」

「う……で、でもまだまだです！ダメージジチェック、1枚目、神界獣 フェンリル。2枚

目、ドリーミング・ドラゴン。スタンドトリガー！パワーはフェンリル！（16000）」「スチームブレスのブースト、アップストリームでアタック！GBで、パワープラス4000！（25000）」

「ククリヒメでガード！」

ガードされたか。俺はアップストリームのスキルで、左後列にもう1体、頂に立つギアウルフ（7000）をスペリオルコールする。

「俺はこれでターンエンドだな」

カズキ：ダメージ3（裏1） マオ：ダメージ5

「追い詰められましたね……。私のターン！スタンドアンドドロ！スコルをコストに、ジェネレーションゾーン解放!!」

ジェネシスのGユニット……。どんなのが来る？

「示し出せ！彩られた未来の形を！ストライドジェネレーション!!大天使 ドウムプレイズ!!（26000）」

「ドウムプレイズ……。攻めを選んだのかな」

どういうことだ？冷静に分析してるのはいいんだけど……。

「フェンリルのストライドスキルで、SC3します」

「ストライドだけで、ソウルを3枚も増やすのかよ……」

けど、増えたソウルをどうするのかはまだわからない。このデッキでも、ソウルを使うカードってあまりなかった気がするし……。

「神界蛇 ヨルムンガンド(9000)をコールして、ドゥームプレイズスキル発動です！SB3、これでヨルムンガンドとクレイマー・ハリーにパワープラス5000！（ヨルムン 14000）（クレイマー 11000）」

「パワーを上げた……ソウルを貯めたのは、こういうことか」

ジェネシスは、ソウルを駆使して強力なスキルを使うユニットが多い。そのために、ソウルをため込むユニットも数多く存在する。

マオさんはハティ、ヘスペリス、グレイプニルをドロップした。

「このスキル発揮後、ソウルが2枚以下ならSC3します。さらにヨルムンガンドのGB！ソウルから捨てられたカード1枚につき、パワープラス1000！3枚でプラス3000！（17000）」

「使ったソウルが、すぐに元通りに……」

「まだ終わりませんよ？フェンリルのストライドスキル！ソウルから捨てられたカードを、ターンに1度だけCB1してコールできます！」

リアガードまで展開するのかよ!? 思ったより手強いな、ジェネシスは!

「私はC B 1して、ドロップした貪り喰うもの　グレイプニル(9000)をスペリオルコール! さらにクレイマー・ハリーのGBで、ソウルからドロップされたカードをターンに1回、1枚デッキの下に置いて、C C 1です!」

マオさんは神界獣　ハティを下に戻して、フェンリルのスキルのコストをも帳消しにする。安定したカード運びだ。

「まだですよ? ソウルから捨てられたヘスペリスのスキル! ドウムプレイズに、アタックがヴァンガードにヒットすれば相手のリアガードを退却するスキルを与えます!」

「たった1回のスキルから、ここまで連鎖するなんて……。これがコンボか。凄いな、マオさん!」

「そ、そんなことないですよ。では、行きます! クレイマーのブースト、グレイプニルでアタック! GBにより、C B 1してS C 3。さらにこのターン、ソウルからカードが捨てられているなら、1ドローします! (20000)」

ドウムプレイズのスキルで、ソウルは捨てられている。マオさんは問題なくドローした。

「くらわない! マシユダでガード!」

「バンピングのブースト、ドウムプレイズでアタック！（31000）」

「ノーガード！」

ユウキのファイトで、ダメージの受け方は学んだからな！ここはダメージ3だし、遠慮なくノーガードする！

「トリプルドライブです！1枚目、青春の女神 ヘーベー。ヒールトリガーです！ダメージを1枚回復して、パワーはヨルムンガンド！（22000）」

「……でのヒールトリガーは大きいな……。次のターンに余裕が生まれてしまった。

「2枚目、寵の女神 ヘステイア。3枚目、ドリーミング・ドラゴン。スタンドトリガー！効果は全てグレイブニルへ！（14000）」

後2回アタックが来る……。

「ダメージチェック、ラッキーパーット・ドラゴキッド。ドロートリガー！1枚ドローして、パワーはクロノジェットだ！（16000）」

いや、1回になった。

「これじゃアグレイブニルは通らない……。でも、ヘスペリスのスキルです！アタックヒットで、左後列のギアウルフを退却！」

「ち……」

「ヘーベーのブースト、ヨルムンガンドでアタック！（27000）」

「こいつもノーガードだ」

ダメージには、アップストリーム・ドラゴンが入る。さつき使った奴か？

「ターンエンドです」

カズキ：ダメージ5（裏1） マオ：ダメージ4

「カズキ君、追い詰められてるじゃん」

「うるせえ、まだ終わらないぞ！俺のターン！スタンドアンドロー！」

俺はガンナーギアのスキルで加えたバリフを捨てて……

「ジェネレーションゾーン解放！憧れを翼に変え、未来をこの手に！ストライドジェネレーション！！時空竜 ラグナクロック・ドラゴン！！（26000）」

「厄介なユニットですね……」

「クロノジェットのストライドスキル！CB1でヨルムンガンドをデッキの下に！さらにデッキにカードが戻ったことで、ギアウルフのGB！パワープラス3000！（10000）」

簡単にパワーを上げられるギアウルフ。なかなか重宝する1枚だ。

「スチームプレスの前に、スチームファイター アンバー（9000）、左前列にドキド



キ・ワーカー(4000)、左後列にスチームファイター ウルニギン(7000)をコール!」

「また一気にコールする……。もう少し、手札管理のことも考えないといけないよ?」

ホノカさんの言うことはもつともだ。手札は2枚しか残ってないし。けど、何も無策で攻めていけない!

「ウルニギンのブースト、ドキドキ・ワーカーでアタック!(11000)」

「グレイブニルでインターセプトです!」

って言うか、何だかんだで俺にアドバイスしてるよなホノカさん。

「ギアウルフのブースト、ラグナクロックでアタック!ドキドキ・ワーカーのスキルで、グレード3以上のクロノジェットがアタックした時、自身をソウルに入れてードロー!ラグナクロックにパワープラス5000!」

「なるほどね。アタックしながら、手札を増やすためか。考えてるね」

「マオさんの味方するんじゃないよ!マオちゃん、大丈夫?」

「なっ、聞き捨てならないよ!マオちゃん、大丈夫?」

「私だって、負けるつもりはありませんから。次のターンで決めて見せます!」

おっ、そんな言葉を待ってたんだ。じゃあ行くぞ!

「ラグナクロックのスキル!CB1して、Gゾーンから裏のラグナクロックを1枚表に

「することで、このアタックはグレード0でガードできなくなる！」

だが、このスキルには続きがある。

「さらに、Gゾーンに表のカードが2枚以上あるなら、クリティカルプラス1！（41000 ☆2）」

「衰微の女神 ヘルで完全ガード！コストはヨルムンガンドです！」

「トリプルドライブ！1枚目、クロノジエツト・ドラゴン。2枚目、グリマープレス・ドラゴン。3枚目、スチームファイター マシユダ。クリティカルトリガー！効果はアンバーへ！（14000 ☆2）」

ガードはされたが、これで満足な手札は残っていないはず。これなら！

「スチームプレスのブースト、アンバーでアタック！ブーストされていることで、GB！CB1してハリーをデッキの下に！」

「残っているリアガードが、50000パワーのカードだけに……！」

「ウルニギンのスキルで、デッキにカードが戻った時、CC1！こいつでどうだ！（21000 ☆2）」

「う……まだです！へーべーとククリヒメでガード！」

「ターンエンドだ」

カズキ：ダメージ5（裏3） マオ：ダメージ4

「私のターン、スタンドアンドドロウです！」

「カズキ君、あんなこと言っておいて決められなかったね。恥ずかしい……」

「や、止めろ！次は決める！」

「あの……私、このターンで決めるつもりなんですけど」

「え？」

「ジェネレーションゾーン解放!!」

ヘステイアがコストとして、ドロップゾーンに置かれる。新たなるGユニットが、解き放たれる。

「出し出せ！彩られた未来の形を！ストライドジェネレーション!!」

またドウムプレイズか？だが、マオさんの出したユニットは、さっきのような天使とは大きく異なっていた。

「破壊神獣 ヴァナルガンド!!（26000）」

「それって……」

「私が落としちゃったカードです。では行きます！ストライドスキルでSC3。ドリーミング・ドラゴン（4000）と、神界獣 ハテイ（7000）をコール！」

ヴァナルガンド……どんなスキルを持っている？

「ヘーバーのブースト、ドリーミング・ドラゴンで、アンバーにアタックです！（9000）」

「インターセプトを狙ってるってことだな。ノーガード！」

「バンピングのブースト、ヴァナルガンドでアタック！ここでヴァナルガンドのGB2！SB6、Gゾーンから裏のヴァナルガンドを1枚表にします！」

ん？それだけ？コストを払っただけで、効果はどうした？

「フェンリルのストライドスキルで、CB1してドロップした貪り喰うもの グレイブニル（9000）をスペリオルコール！ハティのGBも発動！ドロップしたソウル1枚につき、パワープラス10000！」

今のスキルでドロップされたソウルは6枚だから……。

「パワープラス6000！（13000）そしてこれが、ヴァナルガンドのメインのアタック！（31000）」

「やらせるか！スチームメイデン アルリムで完全ガード！コストはクロノジェットだ！」

「完全ガード……。では、こつちもヴァナルガンドのスキル発動！ドライブチェックに入る前に、デッキの上から4枚を確認します！」

……は？確認？

「1、2、3……4と。そして、その中から好きな枚数、デッキの上に置いて、残りをデッキの下に置きます！」

「なっ……!?ということは、チェックするカードを固定した……!?」

「じゃあ、間違いなくドライブチェックでトリガーを引かれるってことだ。何てスキルを持つんだ……。」

「マオちゃんは、2枚を上。2枚を下に置いた」

「つてことは、2枚はトリガーかよ……」

「そうです。トリプルドライブ！1枚目、戦巫女 ククリヒメ。2枚目、バンピング・バツファロー。どっちもクリティカルトリガーです！」

「余裕でダブルクリティカルか。後続にはアタックできるグレイプニルがいるからな……。防げるか？」

「効果は全てグレイプニルへ！（19000 ☆3）3枚目、戦巫女 ククリヒメ。あつ！クリティカルトリガー！」

「3枚目もトリガー!?!」

「や、やった！効果は全てグレイプニル！（24000 ☆4）」

「嘘だろ……。あんなの喰らったら、ひとたまりもないぞ!?!」

「ハティのブースト、グレイブニルでアタックです！グレイブニルのGB！CB1してSC3！このターンもソウルからカードがドロップされているから、1枚ドロロー！（37000 ☆4）」

「く……マシユダ、ウルル、グリマーブレス、ラッキーポットでガード！」

「た、ターンエンドです。でも、ドリーミング・ドラゴンのGB！このカードとドロップゾーンのカードを全てデッキに戻してシャッフルし、10枚以上戻したことで1枚ドロロー！」

カズキ：ダメージ5（裏3） マオ：ダメージ4

「俺のターン、スタンドアンドドロロー！」

何とかターンをつなげたが、俺の手札はない。向こうは5枚の手札を持っている。

このピンチを打開するためのカードは、このドロローで来た。だから今、解き放つ。

真の力を得た、俺の切り札を出すために。

「ジェネレーションゾーン解放！憧れを翼に変え、未来をこの手に！ストライドジェネレーション!!」

スチームブレスを手札から捨てて、俺はGゾーンから1枚のカードを掴む。そして俺

は、クロノジェットのの上にそのカードを重ねた……！」

「これが俺の、ヴァンガードを始めたきっかけだ！行くぞ！クロノドラゴン・ネクステージ!! (26000)」

「ここ、ここでネクステージですか……！」

「クロノジェットのストライドスキル！C B 1で、グレイプニルをデッキの下に！」

インターセプトするユニットはいなくなつた。これで防御力は低下した！

「デッキにカードが戻つたことで、ギアウルフのG B！パワープラス3000！（10000）さらにウルニギンのG Bも発動！C C 1だ！」

「コンボの連携も使えるように……。カズキ君、成長してるな」

「ネクステージ！ブーストはつけずにアタック！（26000）」

ブーストをつけない理由は、後でわかる。

「2体のククリヒメ、ヘスペリスでガード！」

「トリガー2枚か。だけど……最初からここで引くつもりはない！トリプルドライブ！」

1枚目、スチームファイター バリフ。2枚目、スチームメイデン アルリム。3枚目、スチームファイター マシユダ。クリティカルトリガー！効果はギアウルフだ！（15000 ☆2）」

とか言いながら引いてしまつただけだな。でも、このアタックは通ると考えてな

かったから、予想通りだ。

「来るよ、マオちゃん！」

「はい……………」

「ようやくお前のスキルが使えるな……………！ネクスステージのGB2！CB1、手札3枚を捨て、Gゾーンから裏のネクスステージを1枚表に！」

俺はドライブチェックで引いたカードを全て捨てて、ネクスステージのスキルを使う。

「ネクスステージをGゾーンに表で戻し、ヴァンガードをスタンド！これでもう1度、アタックできる！」

これならドライブチェックも使える。しかも、クロノジェットがヴァンガードなら、あれも使える。

「ギアウルフのブースト、クロノジェットでアタック！アタックした時、クロノジェットのGB2発動！パワープラス5000！グレード1以上でガードできない！（31000）」

マオさんの手札は残り2枚。このパワーをグレード0のカード2枚でガードすることは、できないはず！

「……………ノーガードです！」

「ツインドライブ！1枚目……………アップストリーム・ドラゴン。2枚目……………ドキドキ・ワー



カー。クリティカルトリガー！効果は全てクロノジェットだ！（36000 ☆2）」

ダメージには、革の戒め レージングと、衰微の女神 ヘルが入る。どちらもトリガーではなく、俺の勝利が決まった。

「……凄いですね！まさかネクステージで止めをさされるとは思ってませんでした！」  
「俺も危なかった。ヴァナルガンドのスキル、あれヤバイだろ」

「デツキを片付けながら、さっきのファイトについて話し合う。マオさん、本当に強かった。」

「うん、いいね。お互いを称えあうこの感じ、悪くないよ。マオちゃんもよく頑張ったね！」

「ありがとう、ホノカさん！応援してくれたのも、嬉しかったよ」

「あれはひどかったな……」

「そんなに落ち込まないでよ、カズキ君。ちよつとからかっただけじゃん」  
「う……」

あ、そうだ。忘れないうちにチームの話をしておくか。

「なあ、マオさん」

「何ですか？」

「実は俺とホノカさん、チームを組んでるんだ。ウエルテクスカップの」

「あの大会ですか？」

「そう。でも、後1人メンバーが足りなくてさ……。マオさんさえよかったら、一緒にチームになつてくれないかと思つてるんだけど」

ホノカさんも首を振つて参加を促す。それに対するマオさんの反応は。

「えっ!?!私ですか!?!いや、でもウエルテクスカップですよね!?!私じゃ力不足だと思ひますよ……?！」

まあ、そうなるよな。

「そんなことないよ。マオちゃん強かつたし、ぜひチームに入つてほしい!お願いします!！」

「ホノカさん……」

「俺からも頼みたいんだ。ホノカさんも言つたけど、マオさんは強いよ。けど、それ以上に俺は、友達と一緒にチームを組みたいんだ」

「友達……」

マオさんは考え込んでしまった。俺変なこと言つたかな?少し気になつてきた。

だが、すぐにマオさんの中で意見がまとまつたみたいだった。

「……わかりました。そこまでお願いされたら、断るのは悪いです。チームに入ります!！」

「やったー！ありがとう、マオちゃん!!」

よかった。これでメンバーは3人。ウエルテクスカップに参加するチームは、今誕生した。

「でも、本当に私でいいんですか？」

「ああ。俺たちには、マオさんが必要なんだよ」

「……っ！え、えと、その……そういうの、不意打ちで言うのはよくないです／＼」

え、あれ？また何か変なこと言ったか？

「今のは、カズキ君が悪い」

「何でだよ」

「だ、だつてそうだよ！女の子に向かって、君の事が必要なんだ！とか……よくそんな恥ずかしいこと言えるよね／＼」

「なっ!?!／＼」

何はともあれ、これでチームは完成した。俺たちはこれから、まだ見ぬファイターたちの集う舞台に足を踏み入れることになる。

けど……想像もしていない。このチームが、まさかあんなことになるとは。

やがて迎える結末を、俺はこの時考えているわけなかった……。

## turn7 名前

「ネクステージのGB2！CB1、手札3枚とGゾーンのネクステージを1枚表に！」  
「くっそ！俺のおかげで手に入れたネクステージを、もう使いこなしてやがる！」

今はユウキとのファイトの最中。俺がネクステージにストライドし、スキルを使ったところだ。

「ネクステージをGゾーンに戻し、ヴァンガードをスタンド！クロノジェットで、再アタック！」

「GB2でグレード0しかガードできないんだろ！だったら、こいつらでガード！」  
「げっ!？」

トリガー引いても、アタックが通らない……。

「まあ、俺のおかげで手に入れたネクステージを使ったとは言っても？決められる保証はどこにもないんですな〜」

「ぐっ……ターンエンドだよ！」

「んじゃ、サクツと決めてやるぜ。ストライドジェネレーション！征天覇竜 コンクエスト・ドラゴン!!」

嘘だろ、ここですか!?これは不味いぞ!?

「あーこれはカズキ君負けたね」

「そうですね……ドンマイです、カズキ君」

「ちよつ、まだ終わつてないからな!」

「それを俺が終わらせる!ストライドスキルとコンクエストのスキルで、前列のリアガードを2体退却!そして俺の前列にパワープラス10000!」

やつべ……。手札4枚じゃ、もう無理。アウト。

「止めだぜ!コンクエストでアタック!」

「ノーガード……。ダメージチェック、アップストリーム・ドラゴン。6ダメージだ……」

「つしやあ!俺のおかげで手に入れたネクステージも、使いこなせなかったら宝の持ち腐れだな!」

さつきと言つてること違うだろうが。

「……俺のおかげでつて、さつきからうるせえ」

「ん〜?事実を言つたまでだぜ?」

「こんのヤロウ……」

「はいはい、ストップ。喧嘩は止めようね?」

ホノカさんが割り込んで、口喧嘩を止めさせる。釈然としないけど、言っても仕方ない。

「そういや、お前らチーム作ってたんだな」

「ああ。俺とホノカさん。それから、この子が……」

「西野マオです。よろしくお願ひします！」

「おう！俺は真島ユウキだ！よろしくな！」

何気に今日が初対面だな。2人は、互いに自己紹介を済ませる。

「つーか、何だよお前のチーム。ハーレムか」

「違えよ。知り合い同士でチーム組みたかっただけだ」

「でもよ。結果こうなってるじゃねえか」

ホノカさんとマオさんを交互に見比べて、最後にユウキは俺を見る。

「片や元気っ子。片や清楚系。何だよお前！羨ましいぞ！三角関係作りやがって！」

「キモいぞ」

「うるせえ！俺のチームとは比べ物にならないくらいなんだよ！」

……そういや、こいつのチームメイトって見たことないよな。どんな奴らなんだろう？1回会ってみたいな。

「三角関係なんて言うほど、まだ付き合い長くないですよね。私、まだカズキ君と知り

合ったばかりですし。ホノカさんも、そうですね？」

「う、うん。カズキ君もきつと、そんな色目で見ているわけないよ」

「……何で顔が赤いんですか？」

「いいの！気にしないで！」

「もしかして……」

「それ以上はなし！どうしても話したいなら、後で2人でしょう！うん！」

とか言ってる側で、女子は女子で何か話し出したし。それに、何でホノカさんは照れているんだ？

「なあ、そのポジション交換しない？」

「って、この話続けるのか。やだよ」

「何でだよ！いいじゃねえか、ケチ！」

「むしろ、ユウキの考え方がぶっ飛んでるんだよな……」

チームメイトの取り換えとか、そんなの聞いたことないんだけど。てか、チームメイトに失礼だろうが。

「あのな。俺はこの3人がいいんだ。みんなも納得してチームに入ってくれたし、

くっ……仕方ない。チームの交換はなすってことに——」

「当たり前だよ！ユウキ!!」

遠くから、ユウキの身勝手な提案に対して猛反対を入れる2人が駆け寄ってきた。1人は小柄。もう1人はポツチャリ体質の男子だった。

「チーム交換とか、何言ってるんですか!」

「そうだよ、ユウキ。僕たちの絆は、あんな下心丸出しの男1人で揺らぐものだったの?」

あのデブ……言い方を考えろ。それに、違うって言ってるだろうが。

「す、すまんお前ら。軽いジョークに決まってるんだろ?」

半分くらい本気に聞こえたのは気のせいかな。いや、それはもう突っ込むのはよそう。

この3人の慣れ親しんだ感じ……。もしかすると、そうなのかもしれない。

「こいつらって、ユウキのチームメイトか?」

「おう!この小さいのが、中川ハルキ。デブなのが、今井シンヤだ」

「ふくよかつて言ってるって、いつも頼んでるじゃん!ユウキ!」

「いや、お前のはもうデブだよ」

「そんな〜!」

マジで仲良さそうだな。俺たちのチームも、あんな風になれるかな?

でもこんな感じのチーム、何かで見たことがあるような気がするんだけどな……。

「……何か、アニメに登場するトリニティドラゴンみたい」



「「あんなギャグチームと一緒にするな!」」

……そういうことか。ホノカさんに勧められて、ヴァンガードを学ぶ一環としてアニメを見てただけど……ホノカさんの一言で思い出した。

「案外、名前もトリニティドラゴンだったりしてな」

「違うに決まってるでしょう!?!ユウキ、ここはかつこよく紹介しましょう!」

「おうよ!いつもの決め台詞、行くぞ!」

そう言うのと、ユウキたち3人は左手を重ね合わせ、右手を交差する。そして、

「ワンフオーオール!オールフオーワン!我ら、ユナイタルナイツ!!」

3人がそれぞれ決めポーズを取り、名乗りを終えた。

「ふっ、決まった……!」

「……やっぱりトリニティドラゴンだよ」

「ですね。私も、その……そう思います」

「「1人増えた!」」

いや、俺もそう思うんだけど。

「全く……俺たちが3日かけて考えた最高の名前をバカにしやがって!」

「3日も考えたんですね……」

「マオちゃん、苦笑しない!そういうお前らは、チーム名何なんだよ!」

「「……………え？」」

\*\*\*\*\*

チーム名。言われてみれば、そんなもの考えてもなかった。

とりあえず、まずはチームメイトを集めること。それを優先させて行動していたからな。

だから……………ユウキにその点を指摘されたときには、ハッキリ言つて気づかされた。完全に忘れていたことに。

そんなわけで、俺たちはチームの名前を考えないといけない。そのために俺たちは今……………。

「いや、何でショッピングモールに？」

「いいでしょ？たまには、ヴァンガード以外の付き合いもいいと思うんだ」

ホノカさんの提案で、週末を使ってショッピングモールに来ていた。もちろん、マオさんも一緒だ。

「まだまだ知り合ったばかりだし、仲を深める機会だと思つてさ」

「いや、俺は嫌だとは言つてないよ。こうしてみんなと休日に出かけるなんて初めてだし、新鮮な感じで悪くないな」

2人の私服を見るのも初めてだけど……可愛いな。俺、普通な格好だけど、大丈夫だよな？

「でしょ？それに、今日の出来事でチーム名が思いつくかもしれないからね」

「そうですね。今日は1日楽しみましたよ！」

「おー！」

というわけで、時刻は11時を過ぎたところ。まだまだやれることはたくさんある。

「そうと決まれば、これからどうしようか？」

「そうだね……。マオちゃん、何かある？」

「私ですか？うくん……カズキ君は行きたい場所とかないですか？」

俺が話振つたのに、見事にブーメラン返ってきたぞ……。

「俺？俺は2人に合わせるよ。男子の行きたい場所に女子を付き合わせても、退屈すると思うんだ」

「そう言われてもね……」

俺だって、そう言われてすぐに行きたい場所なんて思いつかなかつたんだよ。仕方な

い。

「あつ、なら私の行きたい場所でいいですか？」

「お、どこだ？」

「最近行つてなかつたので、服を見に行きたいなと」

つてことは、服屋か。それなら、いくつか店があるから、見て回れるな。

「あ、でもカズキ君は大丈夫ですか？」

「大丈夫だよ。男性の意見もあった方が、服を選びやすいだろう。」

「何なら、カズキ君に女性の服着せてみるのもいいかも」

「いやホノカさん!?!それは待つてくれません!?!」

それから俺たちは、何軒かの服屋を見て回つた。女性物の服を扱う店には入つたことがなかつたから、かなり恥ずかしかつたけど。女性物の服を扱う店には入つたこと

でも、マオさんの中で気に入つた服が見つかつたみたいで、何個か購入していた。ホノカさんも、マオさんと一緒になって服を選んでたけど、今日は断念するらしい。

その際、俺がマジで女性物の服を着せられて、2人に何枚も写真撮られたのは、凄く恥ずかしかつたけどな。

\*\*\*

私たちは今、休日のショッピングモールに来ている。カズキ君とマオちゃんと、3人で。

ショッピングにいるだけじゃ退屈だし、たまには皆でどこかに遊びに行きたかったからね。私が提案して、2人もそれに乗ってくれた。

マオちゃんの提案でさつきまで服屋を回り、今はショッピングモール内のファミレスで昼食をとっていた。

「ホノカさん、そのパスタ美味しそうですね？」

「うん、美味しいよ。一口食べてみる？」

「じゃあ、私のグラタンも一口あげますよ」

「ありがとうー！」

私はパスタ、マオちゃんはグラタン、カズキ君はハンバーグを注文していた。

私はマオちゃんから貰ったグラタンを口に入れる。熱いけど、チーズがトロトロで美味しかったよ。

「美味しいですねー！」

「でしょ？マオちゃんのグラタンも美味しかったよ！」

「あ、カズキ君も一口どうですか？」

「俺もいいのか？」

「はい。じゃあ……どうぞ。熱いので、気をつけてくださいね」

そう言つて、マオちゃんはグラタンを自分のスプーンですくつてカズキ君の口に近づける。

「……あ」

カズキ君も、されるがままに口を開けて熱々のグラタンを口に含む。熱そうに息をしていたが、すぐに飲み込んだ。

けど、これって……。

「うん、旨いな。けど、舌が……」

「ちゃんと吹かないといけないですよ？」

「ああ……」

マオちゃんにその気があるのかはわからないけど、あれは……間接キスだよな。

それに、やっていることはまるでカップルみたい……。

「……カズキ君。口にチーズついてるよ」

「ん？あ、本当だ」

「私取ってあげるよ」

「大丈夫だよ。自分で取れるから」

「いいって。私にやらせて?」

私は手を伸ばし、カズキ君の口についていたチーズを指で絡めとる。チラリとカズキ君を見ると、少しドギマギしているみたいで頬が赤くなっていた。

何だかこつちも恥ずかしくなり、指についたチーズを口に含むと、さつき食べたグラタンの味とは違つて感じた。

「あ……俺ちよつと、トイレに行つてきてもいいかな?」

「お手洗いですか? いいですよ」

「ありがとう。じゃあ……」

カズキ君が席を立ち、私たち2人が残された。マオちゃんはまた、グラタンを食べ始めている。

「……………」

私は、さつきの出来事が気になり、少し話を振ることにする。

「あ、あのさ……マオちゃん」

「何ですか?」

「さ、さつきカズキ君にグラタン食べさせたのって、その……えと……」

「ホノカさん？」

言葉がしどろもどろになる。その先の言葉を口にしようとする、何故か胸が苦しくて。どうしてなのかは、よくわからないんだけど。

「何か……その、カップルみたいだなんて。自分のスプーン使ってたし、間接キスしたし……」

「……あつ／＼／」

気づいてなかったんだ……。しかも、マオちゃんさつきグラタン食べたよね……。

「か、カップルだなんてそんなことないですよ!?!何も考えないで、自分のスプーン使ってたし……。それに私、か、かんせ、つ……／＼／」

自分の行いを振り返り、口を抑えて真っ赤になる。その様子を見て、少しほつとしている自分がいることに、驚いていた。

「お、男の子とそんな……間接キスしたことなんてないのに……」

「そんなの私もないよ。いつもお昼一緒に食べるときも、そんなことないのに……」

すると、何故かマオちゃんが私の顔をじーっと見つめてくる。そして、クスツと笑う。

「何、マオちゃん？私の顔に、何かついてる？」

「もしかして……焼きもち焼いてるんですか？」

「……っ！／＼／」



今度は、私が真っ赤になる番だった。焼きもち。それはつまり、さっきのことを快く思わないこと。その理由は……。

「その反応、ホノカさんってカズキ君のことが気になってるんですか？」

「え!? ちよつ、何言ってるのマオちゃん!？」

「隠さなくてもわかるよ、ホノカさん。今日のホノカさん、楽しそうだから」

「……………」

私……そう言うことなのかな。カズキ君と出会って、一緒にデッキ作ったりして。気がつくのと、いつも一緒だ。

それに私は、カズキ君といると、とても楽しいんだ。今日こうして一緒に遊んでいても、ずっと笑っている気がする。

多分、今日カズキ君を誘ったのは……一緒に居たかったんだね。知らないうちに、私はカズキ君のことを考えていたんだね。

それって、好きってことなのかな。

「……………うん、好きだよ。そう言い切るだけの付き合いは、まだないけど……私がカズキ君に感じている気持ちは、きつと友達としての関係だけじゃない」

「ふふつ。乙女ですね、ホノカさん!」

「ちよ、ちよつとマオちゃん! からかわないですよ! / / /」

自分の言ったことを反芻し、本人がいなくて本当によかったと安堵する。こんな、  
恥ずかしいもん。

「じゃあマオちゃんはその、カズキ君のことどう思ってるの?」

「私は……一緒にいて楽しい人だとは思いますが。嫌いじゃないです」

「それって、気はあるってこと?」

「どうなんでしょう?今はまだ、友達だと思ってます。でも、もしかしたらそんな風に見  
る日が……来るのかもしれないね」

その言葉に少し安心感を覚えながら、私は冷めかけたパスタをフォークで絡め取っ  
た。

\*\*\*

「……何なんだよ、本当に」

食べかけのハンバーグを放っておいて、俺はトイレの個室にこもっていた。

別に腹が痛いわけじゃない。問題は別にあった。

「思わず逃げ出したけど……あのままだったら、恥ずかしくてまともに食事できなかつたぞ……」

女子2人と食事。それだけでも緊張するシチュエーションなのに、あろうことか女子に食べさせてもらえるなんて。

しかも後で気づいたが、俺マオさんと……か、間接キスしてるよな？／／／  
そんなカツプルみたいなことされても、俺はどうすればいいんだよ。恥ずかしさを必死に押し殺すので精一杯だったぞ!!

それだけならまだいい。追い討ちをかけたのは、ホノカさんだ。顔近かつたし、まだホノカさんの指の感触を覚えている。

……何だよ、本当に。カツプルに有りがちなシチュエーションでしかない。

別に、俺は2人のことをそんな風に思っているわけではない。色目を使っているとか、そんな誤解は絶対するなよ!?

「……………ふう」

ドキドキした気分も、少しは落ち着いていたか。いつまでもトイレにいるわけにもいかなしいし。

「全く……ホノカさんもあんなことするんだな……」

そんなことを考えている俺の脳裏にふと、さっきのホノカさんの顔が浮かぶ。

「……あれ？」

何で俺は今、ホノカさんの事を考えたんだ？

\*\*\*

その後、特に何事もなく昼食を済ませた俺たちは、次に向かう場所を決めかねていた。「昼過ぎになってきたから、人が増えてきたね……」

「そうですね。これからどうしましょうか？」

どこに行くにしても、こうも人が多いと場所が限られてくる。どうしようか……。

「うくん。候補はあるんだけどな」

「カズキ君も？私も、1つ行きたい場所があるんだけど」

「どこなんですか？」

「映画館とか……」

2人の声がハモる。そして、俺たちは顔を見合わせる。その様子が可笑しかったのか、マオさんは笑いだした。

「2人とも、仲がいいですね？」

「まさか一緒の考えだとは思ってなかったけどな」

「でも、この人波が去るまで時間を潰せそうなのって、映画館くらいしかないと思ったんだけど」

「俺も全く同じ理由……」

という訳で、俺たちはショッピングモールに隣接している映画館に向かうことに。幸いにも、そこまで人はいなかった。

「何見ようか？」

「それなら、こういうのはどう？恋愛物なんだけど」

「うん、有りだな。マオさんは？」

「私は……これですね」

「……えっ？」

で、結局何を見ることになったのかと言うと……。

「ちよつと、本当にこれにするの!？」

「いや、別にいいだろ。俺も気にはなるし」

「ええ……でも……」

「まあまあ、大丈夫ですって」

俺たちの購入した映画のチケット。そのタイトルは『廃屋の真実』。何となく、タイトルで想像できた人もいるかもしれないが……ホラー映画だ。

「けど、意外だな。マオさんがこんなの好きなんて」

「怖いけど、結構いける方なんですよ？ たまにレンタルして、家でホラー映画を見ることもありますし」

「うう……。私、怖いのが苦手なのに……」

「そんなこと言ってもな……。あ、始まるぞ」

会場が暗くなり、映画が始まった。ストーリーは、人の近づく事ができないほど険しい地形に建っていた廃屋で、何故か夜中に聞こえる悲鳴。その正体を探るために、主人公たちは廃屋に向かうことになる……という話だ。

テレビでよくCMもしていたし、密かに気にはなっていた。けど俺、ホラー耐性があるわけじゃないんだよな……。

「ヤバいですよ。きつと主人公の背後にいますって」

「ちよ、そんな事言わないで！ もう心臓とか、色々限界！」

「まだ半分くらいだろ……。って、うわああ!!」

「キヤアアアア!!」

いきなり画面にドアップで女の人の恐ろしい顔が。が、それ以上に驚いたのは、隣に

座るホノカさんの悲鳴。

「お、脅かすなよ!」

「だってえ……」

ふと、俺の腕を包む暖かい感覚があることに気がついた。横を見ると、暗闇でよく見えないものの、ホノカさんが俺の腕にしがみついているようだった。

「……………」

不覚にも、別の意味でドキドキしているんだが。

「ふう、ビックリしましたね。でも、多分もう一段落ありますね」

「と言うと?」

「主人公の逃げた先の曲がり角。あそこで何か待ち構え——」

「ギヤアアア!」

「あつ。言った通りになりましたね」

何でマオさんは、そんなに平然としていられるんだよ!?

「あ、ところでホノカさん」

「今度は何なの、マオちゃん……?」

俺にはよく見えなかったが、何やら耳打ちをしているみたいだった。その途端に、ホノカさんが俺を掴む手に力が入る。

「痛っ!? え、何!？」

「な、何でもない! ごめんね、カズキ君! / / /」

何か慌てていた? 確かめようと俺の視線から逸れるように、ホノカさんは別の方を向く。

疑問が残ったが、そこから先の恐怖のオンパレードに、映画が終わる頃には忘れてしまっていた。

\*\*\*

「いや〜怖かったですね!」

「う、うん……」

恐怖で叫び続けていた俺は、既に体力と気力が尽きかけていた。ホノカさんも、元気がない。

「私、今日寝るの怖いな……。ねえ、カズキ君。夜に電話しても大丈夫?」

「そこまでするのか……」



映画館から出るときには、ホノカさんほとんど魂が抜けてたからな。マオさんが手を引いて、何とか歩いていだし。

「で、今からどうする？ホノカさんこんな感じだし、何か気分転換でもしようか」

「賛成！大賛成！楽しいことがいい!!」

「わ、わかったから落ち着こう」

俺たちはショッピングモールに戻り、適当にブラブラしながら次の行き先を探している。

「楽しい場所ですか」

「どうしよう？何かいい場所とかない？」

「そう言うことなら、俺に案があるんだけど」

「どこ行くの？」

「ちよつとした気分転換なら、ゲームセンターとか悪くないかな……って」

そんなわけで、俺たちはショッピングモール内のゲームセンターへ。女子とか、こういう場所には来たことあるのかな？

「ゲームセンターですか。私、こう言うところには来たことないですね」

「私も。で、カズキ君。これから何をするの？」

「そうだな……。どうせなら、分かりやすく盛り上げられるゲームがいいな。となると

……」

俺は目的のゲームを探して、センター内を散策する。2人は俺について回りながら、たまに面白そうなゲームを見つけると俺に聞いてきた。

「……お、あつた。これだ」

それは、真ん中にネットが張られて区切られた、長方形の台。

「エアホッケー！これ私知ってるよ！」

「少し前のバラエティ番組で、やってましたよね」

マオさんの言うとおり、これならルールも簡単で女子にもやり易い。UFOキャッチャーやメダルゲームをするよりは、これくらいがちょうどいい。

「じゃあ誰から行く？」

「私やりたい！マオちゃんは？」

「ここはカズキ君に譲りますね。カズキ君の腕前も見たいです」

「よし……ならホノカさん、向こうに行つて。始めよう！」

「うん！負けないよ!!」

互いに向かい合い、俺たちはホッケーを始める。ヴァンガードとはまた違った勝負事に、俺たちのテンションも上がる。

「そこだ！」

「甘いよ、カズキ君！」

「くっ……。これならどうだ！」

打ち合う音が響き合い、さつきまでの恐怖が嘘のようになくなっていく。勝負に熱中する俺たちに、ついに終幕が訪れる。

「抜ける！ どうだ!?!」

「あつ、しまった！」

ホノカさんの手をすり抜け、軽快な効果音を鳴らしながら、ゴールを決める。今のが勝負の決め手となり、俺の勝利が決まった。

「おお……。凄いですね！」

「悔しい〜！ 次マオちゃん、やろうー！」

「はい！ 負けませんよ？」

その後もホツケーを続け、気分転換は十分に行うことができた。

だが、せっかくゲームセンターに来たのだからと、さつきから気になって聞いてきたゲームを何個かプレイし、時間を忘れて楽しんだ。

その後も、ゲームセンター以外の場所を見て回り、楽しい時間を過ごす。そんな俺たちの休日にも、そろそろ終わりが近づいていた。

\*\*\*

「うわっ、もう暗くなってるな」

「本当だ。こんな遅くまでいたんだね」

俺たちがショッピングモールの外に出た時には、既に太陽が沈んでいた。昼前には来ていたはずなのだが、かなりの時間を過ぎたみたいだ。

「でも楽しかったです！ちよつと疲れちゃいましたけど……」

「疲れたと言えば、ホラー映画の時だな。ホノカさん程じゃなかったけど、怖かったしな」

「今日は眠れるか不安だよ……」

「あつ、見てください2人とも！星ですよ！」

マオさんに言われるまま空を見上げると、そこには満天の星空が。

「綺麗……」

「ああ。この星空を見られてよかったな」

そのきっかけを作ってくれたのは、今日誘ってくれたホノカさんで。そしてマオさん

がいて、俺がいたから、楽しかったんだ。

「……この先も、こうして3人で一緒に楽しいことしたいな」

「うん、そうだね。今度はどこか違う場所に行こうよ」

「私もです。今日は本当に楽しかった。私、人見知りであまり知り合いいないし、友達と遊びに行くことなんて、初めてだったから……」

約束……星空……。

「……スターリープロミス」

「えっ？」

「今、突然思いついたんだ。俺たちの、チームの名前」

星空の下で、いつまでも忘れることのない約束を。この3人で、ずっと仲良くいられるように。

そんな思いを込めた、誓いの名前。

「スターリープロミス……。うん、いいかも！」

「ですね！それで決まりですよ！」

「いいのか？俺が勝手に決めたみたいになっちゃったけど」

「思ったよりもいい名前だったんだもん。それで行こうよ！」

「少し毒吐いたよな……」

けど、2人が納得してくれたのなら、それでいい。俺たちのチーム名が、今決まった。「よし……なら決まりだな！俺たちのチームは、スターリーpromisだ!!」

俺たちのチームの名前が決まり……スターリーpromisの時が、今動き出した。

## turn 8 目覚める真価

スターリープロミス。私たちのチーム名が、この名前に決まった次の日。私はいつも通りにミルキーウェイに来ていた。

「おはようございまーす！」

「いらつしやい、ホノカちゃん。昨日は来なかったみたいだけど、何してたの？」

「ちよつと遊びに行っていました。私たちのチーム、スターリープロミスのみんなで！」

「おつ、チーム名が決まったんだね？なかなかいい名前だよ。誰が決めたの？」

「カズキ君です。みんなで星空を見て、その時に！」

シヨツピングモールからの帰り道。展望台から眺めた景色を見たカズキ君が、突然その名前を口にした。

「やっぱり、昨日みんな遊びに行ったことは間違いないやなかったな。カズキ君とも一緒にいられたし……って、いや、そういうことじゃなくて！／／／」

「あれ？顔が赤いですよ？」

「気にしないで下さい！えつと、今日は誰か来てます？」

「そうだね……ユウキ君はチームのみんなと何やら特訓するみたいでしたよ？カズキ君

は、見てないですね」

ユウキ君たちはいいとしても……カズキ君、来てないんだ。

「あ、でもマオさんは来てますよ？ そのテーブルに座ってるの、彼女ですよね？」  
「本当だ。おっい、マオちゃん！」

向こうも気づいてくれたみたいで、手を振ってくれた。

「おはよう、ホノカさん。カズキ君は一緒じゃないんですね？」

「うん。今日は来てないみたいなんだ」

「そうですか……。何か用事があるんでしょうか？」

「どうなんだろ……」

ちよつと残念だな……。カズキ君とフアイトしたかったのに。

「ホノカさん」

「何？ マオちゃん」

「カズキ君がいないと、寂しそうですね？ 目に見えてわかりますよ？」

「はっ!?! う……ええ、その……／＼／＼」

もう、マオちゃんは鋭いな……。女の感って事なのかな？

「可愛いですよ、ホノカさん。羨ましいです」

「いきなりからかわれるなんて……」



普段は私がカズキ君をからかっているのに……。

「……ところでホノカさん」

「うっ、今度は何？まだ何か表情に出ていた？」

「そう言うわけではないんですけど……」

そう言えば……と、マオは今更ながら気になっていたことを話し出す。

「ホノカさんがファイトしているところって、見たことないです」

私は、カズキ君がファイトをしているところは何回か見たことがある。けど、ホノカさんのファイトは全く知らない。

どんなクランを使うのか、私には見当もついていなかった。

「あれ？そうだった」

「そうですよ。もしかして、隠しているんですか？」

「いやいや、そんなつもりないよ。たまたまだって」

「あつ、そう言えばカズキ君が、ホノカさんはデッキを忘れるドジっ子で有名だった——」

「……マオちゃん、その話詳しく聞かせてもらってもいい？」

こ、怖いですよホノカさん……。

「じ、冗談ですって。それより、私はホノカさんのファイトを見たことはありません。だ

からどうでしょう？ファイトしませんか？」

「ファイト？いいよ。私も、マオちゃんとはファイトしたことなかったからね」

私はデツキを取り出し、ファイトの準備を始める。ホノカさんも、デツキを取り出してシャツフルする。

カズキ君は、ホノカさんのクランを知ってるんでしょうか？私よりは、ホノカさんとの付き合いが長いみたいですけど……。

「言われてみれば、マオちゃんの言うとおりだね。私、カズキ君にもこのデツキ見せたことないかも」

「えっ、そうなんですか？」

「カズキ君とファイトしたの、最初に会ったときだけだからね。あの頃のカズキ君のデツキ、散々だったから」

「散々って……」

「本当なんだよ？デツキ作りに付き合っつて、ファイトどころじゃなかったから。グレードもトリガーも、配分バラバラ。あれなら、マオちゃんも勝てるよ、絶対」

そこまで言い切れるデツキなんて……逆に興味ありますね……。

「けど……私は強いよ。自分で言っちゃうのも何だけどね」

「お手柔らかにお願いしますよ」

「どうか？ 私、ファイトだけは誰にも負けたくないから」

互いにファーストヴァンガードに手をかけ、勝負を始める掛け声を放つ。

「スタンドアップ！ヴァンガード!!」

「私は、革の戒め レージング！(5000)」

自分の実力を豪語するホノカさん。そんなホノカさんが使うクランは……。

「……ネオンメサイア！(5000)」

このユニットは、リンクジョーカーに属しているユニット。ロックと呼ばれる特殊能力を駆使するクランだ。

けど、意外。もつと華やかなクランを使っていると思っただのに。このクランは確か

……元々は侵略者の集団だったはず。

「リンクジョーカーを使うんですね」

「女の子っぽくないって、初めてファイトする人からは言われるけどね」

私も思っていましたからね。もつと可愛らしいクランを使っているのかと……。

「でも、このクランには思い入れがあるから。何を言われても、私はリンク一筋だよ」

「思い入れですか……。そう言うの、何だか羨ましいです」

「そう？じゃあ、私のターンから行くよー！ドロ、ダークメタル・カメレオン(7000)にライド！」

さて……どんなファイトをするのか、見物ですね。

「ネオンメサイアは先駆で後ろに移動。ターンエンドだよ」

「私のターン。ドロロー、神界獣 スコル（7000）にライドします！レージングは後ろに移動して、2体の力でアタックです！（12000）」

「ノーガード！」

「ドライブチェック、神界獣 フェンリル」

よし、キーカードを引くことができました。これなら、上手くファイトを進められそうですね。

「ダメージチェック、アローザル・メサイア」

「ターンエンドです」

マオ：ダメージ0    ホノカ：ダメージ1

「私のターン、ドロロー。それにしても、何とかチームとして形になったな」

「そうですね。私も、まさかチームに誘ってもらえるなんて思ってませんでしたよ」

「マオちゃん強いのに、スカウトの声かかってもおかしくないんだけどね」

「私はその……あまり表に出ない性格ですから。それに、ヴァンガードの腕もまだまだ

です」

そんな私の強さを買ってもらって、一緒にチームを組むことになって。学校でもシヨップでも、目立たないから一人だったけど……カズキ君やホノカさんのおかげで、仲間ができた。

二人にとっては、何気ない話だったのかもしれませんが。でも、私にとっては……。

「私、本当に嬉しいです。二人と一緒にいると、楽しくて仕方ないんです」

「私もだよ、マオちゃん。カズキ君がウエルテクスカップに参加するのを決めて、チームに誘ってくれたこと、嬉しかった。学校にも、ヴァンガードをやってる仲間はいなかったから」

「ホノカさん……」

「大げさだけど、カズキ君がいなかったら、今の私はなかったよ。本当に感謝してる」

それは私ですよ、ホノカさん。

「本人がいたら、とても恥ずかしくて言えませんね」

「そ、それは……いないから言えるんだよ！／／ はい、ファイト再開！重力井戸のレディバトラー（9000）にライド！」

あつ、照れ隠し。ホノカさん、可愛いですね。

「落日の刀身 ダスクブレード（9000）と、デステイニー・ディーラー（7000）」

をコール！ディーラーのスキルで、手札の中性子星のレディガンナーを公開！」

「と言うことは……」

「デッキから、オルターエゴ・メサイアを手札に。公開したレディガンナーは捨てるよ」  
私の使っているスコルと同じようなスキルだ。あのカードをデッキに入れているなら、私同様、ストライドを主軸としたデッキですね。

「ネオンメサイアのブースト、重力井戸のレディバトラーでアタック！（14000）」  
「ノーガードします」

「ドライブチェック……アステロイド・ウルフ。クリティカルトリガーだね！パワーはダスクブレード（14000）クリティカルは重力井戸！（14000 ☆2）」

もうこのタイミングからクリティカルを引きますか……。ダメージは、クレイマー・ハリーと黄昏の神器 ヘスペリスでした。

「ステイニー・ディーラーのブースト、ダスクブレードでアタック！（21000）」  
「う……ここもノーガードです！ダメージチェック、衰微の女神 ヘル」

「よし、いい感じ！ターンエンドだよ！」

マオ：ダメージ3 ホノカ：ダメージ1

「私のターンです。スタンドアンドドロロー！」

ガードする暇もなく、3ダメージ受けてしまった。ここは少しでも追いついておきたいな……。

「ライド！神界蛇 ヨルムンガンド！（9000）」

「気合い入ってるね〜」

「簡単に負けるつもりはありませんから。もう1体、神界蛇 ヨルムンガンド（9000）をコール！そのままアタック！（9000）」

「おっと、超絃理論の愛し子でガード！」

ガードのための手札は持ってましたか……。

「レージングのブースト、ヨルムンガンドでアタックです！（14000）ドライブ チェック、ドリーミング・ドラゴン。スタンドトリガー！」

「いいタイミングでトリガーを……！」

「効果はリアガードのヨルムンガンド！（14000）これで後2回アタックできますよー！」

「やるねえ。ダメージチェック、真空に咲く花 コスモリース」

完全ガードがダメージに入りましたね。ヴァナルガンドを使う以上、相手に完全ガードを持たせてはプレッシャーを与えられませんからね。

「スタンドしたヨルムンガンで、もう1度アタック！（14000）」

「アステロイド・ウルフでガード！」

「くっ……。ターンエンドです」

マオ：ダメージ3　ホノカ：ダメージ2

「私のターン、スタンドアンドドロー！」

結局、1ダメージしか与えられなかった。まだリードを保っているのは、ホノカさんだ。それに、このターンからは……。

「行くよ……。！儂き世界に舞い降りる、変革の救世主！ライド！オルターエゴ・メサイア

!!（11000）」

「おお……！」

グレード3にライドされる。先にツインドライブを使われ、次のターンからもストライドが使われてしまう。

「何もコールしないで、ネオンメサイアのブースト、オルターエゴのアタック！（16000）」

ダメージは3……。Gユニットの事も考えると、ここでノーガードはしなくないです



けど……。

「……ノーガードです！」

手札に恵まれていない。ここは、ノーガードで乗りきるしかありませんね。

「ツインドライブ！1枚目、デステイニー・ディーラー。2枚目、綻びた世界のレディヒーラー。ゲット！ヒールトリガー！」

「っ!?で、でも回復はできない……」

「あちゃ……。なら、パワーはダスクブレード！（14000）」

少し焦ってしまいました……。

「ダメージチェック、青春の女神　へーべー。よし、ヒールトリガー！私はダメージを回復できます！パワーはヴァンガード！（14000）」

「まだまだ追撃！デステイニー・ディーラーのブースト、ダスクブレードでアタック！（21000）」

「バンピング・バツファローでガードします！」

「ヒールは予想外だったな。ターンエンド！」

マオ：ダメージ3　ホノカ：ダメージ2

「私のターンです。スタンドアンドドロ―！」

これで私もグレード3。それに、お互いのヴァンガードがグレード3以上になるから……！

「神喰らう獣を宿す、鎖の音色が響き合う！ライド！神界獣 フェンリル!!（11000）」

「……でも、それだけじゃないよね？」

「当然ですよ。寵の女神 ヘスティアをコストに、ジエネレーションゾーン解放！」

私はヘスティアをドロップゾーンに。そして、Gゾーンのカードを1枚掴む。

「示し出せ！彩られた未来の形を！ストライドジエネレーション!! 天空の女神 デイオネ!!（26000）」

「今回はディオネか……」

前のカズキ君のファイトでは使っていないGユニット。状況を考えると、多分こっちの方がいい。

「フェンリルのストライドスキル！SC3、さらにスキルを与えます！」

「ソウルのカードがドロップゾーンに置かれた時、CB1でその中の1枚をリアガードとしてコールできるんだよね」

「そうです。ヨルムンガンドの後ろに、神界獣 ハティ（7000）をコール。レージン

グのブーストで、ディオネのアタック！（31000）」

ホノカさんのダメージはまだ2。ここは恐らくノーガードしてくるはず。

「……うん、ノーガード！」

やっぱり。それなら、ディオネのスキルを使うことができますね。

「トリプルドライブ！1枚目、戦巫女 ククリヒメ。クリティカルトリガー！パワーは  
ヨルムンガンド（14000）クリティカルはディオネです！（31000 ☆2）」

「く……トリガーはやっぱり引くよね……！」

「2枚目、神界獣 スコル。3枚目、黄昏の神器 ヘスペリス」

でも、1枚だけですか……。スコルが引けたから、まだいいと思いたいですけど……。

「ダメージチェック。1枚目、落日の刀身 ダスクブレード。2枚目、中性子星のレディ  
ガンナー」

「アタックヒットで、ディオネのスキル発動です！SB3、デツキの上から3枚見て……  
衰微の女神 ヘルを手札に加えます」

「完全ガードが手札に……。守りは完璧って事だね」

これで次のターン、どんなアタックだとしても1回は守れます。リンクジョーカーに  
は、ガード制限を持つユニットはいませんかね。

「確認した3枚のうち、残りの2枚はソウルに置きます。さらに、ヨルムンガンドとハ

テイのスキル！ソウルからカードが捨てられるたび、パワープラス10000！3枚でプラス30000！（ヨル 17000）（ハティ 10000）」

「1列で6000もパワーアップか……」

「続けて、フェンリルのストライドスキルで得たスキル！C B 1で、ドロップした貪り喰うもの グレイブニル（9000）をスベリオルコール！」

このグレイブニルは、きっきのストライドスキルでソウルに入ったもの。これで後2回のアタックが可能になる。

「グレイブニルで、ダスクブレードに！（9000）」

「貴重なアタッカーはやらせない！デステイニー・ディーラーでガード！」

「ハティのブースト、ヨルムンガンドでアタック！（27000）」

「こっちは……ノーガード！ダメージチェック、超絃理論の愛し子。ゲット！ドロートリガー……1枚ドロートして、パワーはオルターエゴに！」

「でも、これで5ダメージですよ。ターンエンドです」

マオ：ダメージ3（裏1） ホノカ：ダメージ5

「私のターン、スタンドアンドドロ。やるね、マオちゃん。なかなか強いよ」

「まだまだです。ファイトは終わってないですよ」

「アハハ、そうだね。それじゃあ……オルターエゴをコストに、ジェネレーションゾーン解放!!」

このターンからホノカさんのストライドが来る。問題は、何を出してくるかですね。

「純白の剣で闇を払い、未来への道を切り開く! ストライドジェネレーション!! 創世竜  
アムネスティ・メサイア!! (26000)」

「アムネスティ……!」

「後はないからね。一気に行かせてもらうよ! ストライドスキル!」

ホノカさんがダメージを1枚裏返し、それに応じてネオンメサイアも裏返しになる。

ここに来て、ようやく使ってきた。リンクジョーカーにだけ許された、特殊なスキルを。

「CB1、私はネオンメサイアを“呪縛”して、ヨルムガンドを“呪縛”! アムネスティにパワープラス5000! (31000)」

「あつ……!」

ヨルムガンドも裏向きになり、リアガードサークルに置かれる。これが、リンクジョーカーのスキルである“呪縛”……ロックだ。

ロックされたカードは、アタックやスキルの使用、同列での位置交換、上書きコール

による退却。その一切ができなくなる。

持ち主のターンが終われば、「解呪」……アンロックされ、ロックされたカードは表向きになる。ただし、それ以外にもスキルによってアンロックできる例は存在する。

「重力井戸のレディバトラー（9000）」と、「アローザル・メサイア（9000）」をコピー！重力井戸のGB1で、アローザルをロックしてパワープラス4000！（13000）」

味方をロックする代わりに、パワーを4000プラスできるGB。一見すると、コストに合っていないようにも見えるけど、これは下準備でしかありません。

何故なら、ホノカさんのストライドしたアムネスティには……。

「アステイニー・ディーラーのブースト、ダスクブレードでアタック！この時、ブーストを受けていることで、ダスクブレードのGB1！CB1で、グレイプニルをロック！（16000）」

「またリアガードを……」

これで私の前列には、動けるリアガードがいなくなってしまうました。

「でも、アタックは防ぎます！ククリヒメのガード！」

「ここからが本番！アムネスティでアタック！スキル発動するよ！」

「来ましたか……」

「C B 1、ロックカードを好きな枚数選択して、それらをアンロックするよ。私は、ネオンメサイアとアローザル、グレイプニルをアンロック!」

これがさつき話した、スキルによるアンロック。アンロックしたユニットはスタンド状態になるため、バトルフェイズ中に行えば、連続アタックが可能になる。

けど、わざわざ相手のカードまでアンロックする必要はないはず。それには、ある理由があった。

「アンロックしたカード1枚につき、パワープラス3000!さらに、アンロックしたカードが3枚以上あるから、クリティカルプラス1! (40000 ☆2)」

「くっ……」

「さらにネオンメサイアのG B 1で、アンロックされた時に自身をソウルに。デッキからメサイアのグレード3を手札に加えて、デッキをシャッフルするよ!」

該当するのは、オルターエゴ・メサイア。次のストライドのコストも確保されてしまいました。

「まだまだ!アローザルのG B 1!アンロックされた時、他のリアガード、私はダスクブレードをスタンドして、パワープラス2000! (11000)」

敵だけでなく味方をもアンロックする事で、強力な効果を発揮する。少し前までのリンクジョーカーにはなかった戦い方ですが、より盤面を柔軟に操作できるようになった

と言えますね。

「でも、マオちゃんの手札には、あのユニットがいる……」

「そうです。衰微の女神 ヘルで完全ガード！コストはヘスペリス！」

「だったらトリプルドライブ！1枚目、ダークメタル・カメレオン。2枚目、超絃理論の愛し子。ゲット！ドロートリガー！1ドローして、パワーをダスクブレード！（16000）3枚目、震脚のバルスモンク。ゲット！クリティカルトリガー！効果をダスクブレードへ！（21000 ☆2）」

この土壇場で、2枚もトリガーを引いてみせるなんて……。

「重力井戸で、グレイプニルに！（13000）」

「クレイマー・ハリーでガード！」

「ダスクブレードは、ヴァンガードを攻撃するよ！（21000 ☆2）」

「……ノーガードです」

ダメージは、寵の女神 ヘステイアと神界獣 ハティが入る。これで、私も5ダメージ……。

「ターンエンド！」

マオ：ダメージ5（裏1） ホノカ：ダメージ5（裏2）



「私のターン、スタンドアンドドロウです!」

もう後はないですけど……向こうだってそれは同じ。なら、ここで決めるしかない! 「スコルをコストに……ジェネレーションゾーン解放! 示し出せ! 彩られた未来の形を!」ストライドジェネレーション! 破壊神獣 ヴァナルガンド!! (26000)「

「前にカズキ君を追い詰めた、ヴァナルガンドか……」

「フェンリルのストライドスキル! SC3、ソウルからドロップされたカードを、CB1で1枚だけコールできるスキルを獲得します!」

ソウルは十分にたまりました。これでヴァナルガンドのスキルは問題なく使える。

「レージングのGB1! ソウルに入れることで、ヴァナルガンドにスキルを与えます!」  
「決める気満々つてところかな……?」

「神界獣 ハティ(7000)をグレイプニルの後ろ、ドリーミング・ドラゴン(4000)をヴァナルガンドの後ろにコール! ハティのブースト、グレイプニルでアタック! グレイプニルのGB1で、ブーストされているなら、CB1でSC3!」

「またソウルを貯めてくるか……。ガード! 綻びた世界のレディヒーラー!」

「でも、これならどうですか? ドリーミング・ドラゴンのブースト、ヴァナルガンドでアタック! (30000)」

ヨルムンガンドがロックされているから、このままではヴァナルガンドのアタックで終わってしまう。

けど……。

「ヴァナルガンドのGB2！SB6、Gゾーンから裏のヴァナルガンドを表にします！」  
「これでヴァナルガンドは、スキルを獲得した……」

「それだけじゃないですよ。フェンリルのストライドスキル！CB1で、ソウルからドロップした神界獣 フェンリル（11000）をスペリオルコール！」

私はグレイブニルに上書きコールする。これで、アタッカーは確保できた。

「続けてレージングの与えたスキル！ソウルからドロップした神界獣 スコル（7000）をスペリオルコール！コールするのは、フェンリルの後ろです！」

「ヨルムンガンドをロックしてなかったら、ちよつと危なかったね。このアタックは真空中に咲く花 コスモリースで完全ガード！コストはダークメタル・カメレオン！」

持っていたんですか……！でも、ヴァナルガンドの真価が発揮されるのは、ここからだ。

「ヴァナルガンドのスキル！デッキの上から4枚確認して、その中のカードを好きな枚数デッキの上に戻して、残りをデッキの下に置きます」

「う……」

「私は……2枚を上。2枚を下に。そして、トリプルドライブ！」

「まあ、2枚はトリガーで決まりつて事だよね……」

「1枚目、戦巫女 ククリヒメ。クリティカルトリガー！効果はフェンリル！（16000  
0 ☆2） 2枚目、戦巫女 ククリヒメ。同じくクリティカルトリガー！効果はフェ  
ンリル！（21000 ☆3）」

「ここまででは私が操作したもの。後は、運に委ねるだけ。」

「3枚目……青春の女神 ヘーベ。ヒールトリガーです！ダメージを1枚回復して、  
パワーはフェンリル！（26000 ☆3）」

「このタイミングでトリプルトリガー……!?」

よし、これなら行けます！

「スコルのブースト、フェンリルでアタック！（33000 ☆3）」

「く……まだまだだよ！バルスモンク、超絃理論、レディヒーラーでガード！」

「ガードできるだけのシールドを用意してたなんて……。ターンエンド。ドリーミン  
グ・ドラゴンのGB1で、このカードとドロップゾーンのカードを全て戻し、10枚以  
上戻したことで1ドローします」

「ヨルムンガンドもアンロックされ、リアガードとして戻ってきた。これでターンは終  
了だ。」

マオ：ダメージ5（裏2）　ホノカ：ダメージ5（裏1）

「私のターン、スタンドアンドドロ」

決めきれなかったけど、ホノカさんの手札はかなり削れた。次のターンまで回れば……。

「いいアタックだったね。けど、そう簡単に負けるほど、私は甘くないよ?」

「私だって、まだ負けるつもりはないですよ」

「だよね。でも……勝つのは私だよ! ジェネレーションゾーン解放!」

オルターエゴがコストとして捨てられ、未来への扉を開く。

「純白の剣で闇を払い、未来への道を切り開く! ストライドジェネレーション! 創世竜

アムネスティ・メサイア!!（26000）」

「また……!」

「オルターエゴのストライドスキル! C B 1、アローザルをロックして、フェンリルをロック! アムネスティにパワープラス5000するよ!（31000）」

さっきのターンと同じなら、まだロックは続くはず……。

「2体目のアローザル・メサイア（9000）をコールして、重力井戸のG B 1! 今コー

ルしたアローザルをロックし、パワープラス4000！（13000）

「く……」

「デステイニー・ディーラーのブレスト、ダスクブレードでアタック！ダスクブレードのGB1！ブレストされているので、CB1でヨルムンガンドをロック！（16000）」

「ここは……ノーガード！」

アムネスティはまたクリティカルを増やすはず。ノーガードでは逃げられない。なら、逃げられる間に逃げないと。

「ダメージチェック、貪り喰うもの グレイプニル」

「これでどうかな？アムネスティでアタック！スキル発動！CB1で、2体のアローザルとフェンリルをアンロック！アンロックしたカードは3枚だから、パワープラス9000！クリティカルプラス1！（40000 ☆2）」

やっぱり、脅威的なパワーですね……。けど、ここだけはガードしておかないと……。

「2体のアローザルのGB1！ダスクブレードとデステイニー・ディーラーをスタンド！それぞれにパワープラス2000！（ダスク 11000）（デステイ 9000）」

生き残る可能性があるなら、スタンドした方をノーガードしてヒールトリガーを引くこと。クリティカルの増えたアムネスティでは、連続してヒールトリガーを引ける可能性は低い。

「ククリヒメ2体、ヘーバーでガードです！」

「トリガー1枚……なら、引くよ！トリプルドライブ！」

確実な突破法ではない。けど、可能性はゼロじゃない。私のターンまで回るかどうか、このドライブブチエックにかかっている。

「1枚目、惑星鉱石のレイザーチャージャー。2枚目、落日刀身のダスクブレード。3枚目、震脚のバルスモンク。ゲット！クリティカルトリガー！効果は全てアムネステイへ！（45000 ☆3）」

決まった。さすがに3枚連続でヒールトリガーを引けるはずもなく……ダメージには神界獣 フェンリルが入り、私が負けてしまった。

\*\*\*

「よーし、私の勝ち！」

「強いですね、ホノカさん。もう少しだったんですけど……」

「いやいや、マオちゃんも強かったよ。危ない場面はあったからね」

それでも、勝ったのはホノカさんですからね。カズキ君もですけど、それ以上に強かった気がします。

「今日は負けましたけど、次は負けませんよ」

「次なんて言わないで、今からもう1回ファイトしようよ。たった1回で終わらせるなんて、ちよつともつたいないし」

ホノカさんがデツキをシャツフルし始めるので、私もシャツフルを始める。第二ラウンドのスタートを控える中で、話はこの場にいないカズキ君のものに。

「でも、せつかくならカズキ君ともファイトしたいですね」

「だね。私もカズキ君ともファイトしたいな。このデツキも見せたいし、前のリベンジもしたいし」

「えっ?でもさっき、前のカズキ君のデツキは散々だつて……」

「まぐれ勝ちだったんだよ。上手くトリガーを引かれてね……」

それは確かに悔しいですね……。酷評するくらいにデツキに、運とは言っても負けてしまったんですからね。

「明日にでもファイト挑もうかな。今日いたら、今からファイトしたかったのに」

「私も見たかったです。どっちが勝つのか気になりますから」

「マオちゃんも、カズキ君へのリベンジがあるからね」

「リベンジばかりで大変ですね。カズキ君も」

「アハハ、確かに。……カズキ君、今どこにいるんだろう……？」

\*\*\*

「はあ……っ、はあ……」

「どうした？もう終わりなのか？」

「うるさい……！俺はまだ、終わってない……！」

目の前に浮かぶ台に手つき、俺は息を切らしながら対戦相手を見据える。カードを持つ方の手にも力が入り、眼光も鋭く相手を刺す。

燃え盛る炎の中、浮かび上がる竜のシルエツト。そしてその眼下には、対戦相手の男の姿が。

力なく腰をつく俺のユニットたち。1体、また1体と炎に焼かれ、塵と化して俺の前から消えていく。

無力だった。この男の前では、俺はあまりにも無力だった。唯一残った俺のヴァン



ガードも、風前の灯火。

「ならば見せてみる、戸坂カズキ。お前の力を」

「上等だ……！俺のターン！スタンドアンドドロー!!」

俺のヴァンガード……クロノジエツト・ドラゴンが立ち上がる。灼熱に身を焦がし、ターンは進んでいく……。